俳　句　雑　誌

水　明

２０２５　４月号

令和七年四月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十八巻第四号

《今月のかな女》

灯りし縁に腰かけ落花かな

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

地球温暖化によるものか、今では三月二十日頃には桜が開花し、四月初めにはほとんど散ってしまうようになったが、この句が詠まれた大正十四年頃は、学校の入学式と桜の満開時期が丁度重なっていたと思う。であるから、本句の背景としての時は、四月中旬であろう。花の盛りの頃とは違う淋しさが、「灯りし縁に腰かけ」によって淑やかに表されている。

（鬼之介・註）

水　明　第1135号

今月の巻頭句

季音雪　さよならが両手に残る余寒の日　鈴木康世

季音月　淡月を浚はむばかり春疾風　松井由紀子

季音花　樽酒に木槌の一打初明り　保坂翔太

水明集　蔵の隅絹糸古りたる手毬かな　小林京子

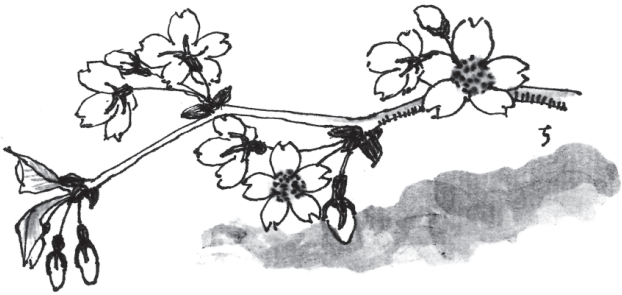
鼓笛集　小流の音軽やかに猫柳　反町修

山紫集　位牌堂を飾る穂長のみな反りて　松宮保人

水明

令和７年
４　月号

今月のかな女　1
今月の巻頭句
学　帽（作品）　山本鬼之介　4
福相寺徜徉（近詠）　境　延昭　6
若狭の風物（近詠）　島津初花　7
百尺竿頭　※主宰作品の鑑賞　五明　昇　8
ゆずり葉　※季音月評　檜鼻ことは　10
季音「雪」（同人作品）　鈴木康世　十倉和子　鳥羽和風　ほか　12
季音「月」（同人作品）　松井由紀子　大場順子　梅澤佐江　ほか　18
季音「花」（同人作品）　保坂翔太　笹本啓子　石田慶子　ほか　23
現代俳句鑑賞　網野月を　28
『水明誌』を繙く　後藤よしみ　30
水明創刊九十五周年記念特別作品募集　31



俳誌望見　梅澤輝翠　32
句集喝采　菅原卓郎　53

水明集　小林京子　播磨　進　飯田忠男　ほか　33

作品鑑賞　山本鬼之介　44
水琴窟（水明集二月号鑑賞）　池田雅夫　48
鼓笛集　50
山紫集　54
水明忌の記　青木鶴城　60
水明の記事他誌より転載　62
水明例会報・各地句会報　63・66
全国大会のお知らせ　71
風声・発展基金御礼　73
後記

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

学帽

山本鬼之介

三月漫歩卯建の数を誇る町

礎はかつての国府春の土

流鏑馬が終はりいつもの木の芽道

手古舞の鉄棒(かなぼう)はづむ春祭

校章に私学の誇り風光る

姫垣を隠しおほせぬ雪柳

かぎりなく添水を鳴らす春の水

唐黍の種に夢見る地平線

福相寺徜徉

境　延昭

門前に寿陵のすすめ春日影

樹木葬はベンチの高さ山笑ふ

まばらなる供花の涸びや寒戻る

住職の愛車レクサス梅日和

春浅し蕎麦屋商ふ焼まんぢゅう

建国日印度独立戦士の像

四阿に立てば鯉浮く春の風

かな女の眠る杉並の福相寺を訪ねた。

昔、数回りんどう忌の会場でした。寺領の墓域に「樹木葬」が出現。特別の樹木がある訳ではない。2m四方程の石の台座が二つその夫々に6×8個の銘板と供花の穴、単なる集合墓としか見えない。

隣の妙法寺の門前、焼きまんじゅうの本家と元祖の二軒がいずれも姿を消していた。帰路、蚕糸の森公園への近道を選び途中の蓮光寺でインド独立戦士チャンドラボースの胸像に出会った。

若狭の風物

島津初花

街道の看板メニューくず湯かな

車座に逝く姉偲ぶくず湯かな

葛の根を豊かな水に寒晒し

春寒や三十三間山から吹き下ろし

里の田へ白鳥降りて睦まじき

白鳥の一群去りて野は広し

遠山のひかりの中へ去ぬ白鳥

宿場町として栄えた若狭から海産物や塩を都へ送っていた中に「若狭もの」と呼ばれた食品に熊川葛があります。山から掘り出された根は清らかな谷川で晒らされ、冬場の産業として製造されます。厳寒の水で何回も踏み叩き出された白色の個体は、寒中の陽と風で自然に乾かす等、伝統的な製造法で守られ「日本三大くず」として今尚息づいています。

また三方湖に直結する田園に毎年晩秋から小白鳥の一群が稽田の生類を求めて飛来します。その愛らしく美しい光景を通る人や近くの住民は静かに見守っているのです。

間もなく春も終わりに近づくと群れは帰って行くのです。

百尺竿頭

◎主宰作品の鑑賞

五明　昇

一月号

奮ひ立つ気象予報士今朝の冬

人気の気象予報士が務める「お天気キャスター」は、ニュース番組の華。暗いニュースが続いても、天気予報に変わり、お天気キャスターが登場するだけで番組がぱっと明るくなる。気象予報士は合格率五％前後の超難関国家資格だが、ラニーニャ現象の影響で日本海側が大雪となった今年の冬は、彼らにとって格好の活躍の舞台となった。

小春日やいざ出陣の東西屋

当り鉦と太鼓を組み合わせて一人で歩きながら演奏できるようにしたチンドン太鼓などを用いて路上で宣伝する職業を「チンドン屋」と称し、戦後のある時期まで隆盛を誇った。口上の始めに「東西東西」と言うところから関西では東西屋の呼称が一般的。掲句は小春日和の一日、チンドン屋の一行が賑やかに街回りに繰り出す様を詠んでおり心が弾む。

麗しき木の葉をひろふ隠れ道

人里離れた隠れ道にどこからか風に乗って飛んできた美しい木の葉との出逢い。まるで天工の贈り物のように、天の木立から舞い降りたような妖しい美しさだ。生い茂っている時には幹や枝と共に一樹を成している葉が、散った瞬間に木の葉としての存在感を得るのは不思議というほか無い。落葉や枯葉には無い木の葉の永遠性を思わせる一句だ。

「くまモン」の表敬受くる檻の熊

くまモンは、熊本県のPRキャラクターで、ゆるキャラグランプリ二〇一一王者である。そのくまモンが檻の熊を表敬訪問したという。訪問地は阿蘇山の麓にある「阿蘇カドリー・ドミニオン」か。この動物公園ではツキノワグマを中心にヒグマ、アメリカクロクマなどいろいろなかわいいクマが人気で、九州で唯一赤ちゃんクマの抱っこ体験もできる。

伝統の一戦ここに空つ風

ラグビーの関東大学対抗戦、伝統の「早明戦」は今年で一〇〇回目を迎え、十二月一日、国立競技場には四万人余りのファンが集まった。吹き募る空っ風の中、試合は序盤から激しい攻防となり、一進一退の激闘の末早稲田が僅差で六年振りの優勝を決めた。早明戦、数々のドラマを生んだ伝統の一戦には、ファンの胸を躍らせる熱い魅力が詰まっている。

二月号

荒星滿つる山のホテルの大玻璃戸

冬、木枯しの吹くような冷たい夜に見る星は、空気が澄んでいるので冴え冴えとしている。牡牛座にある昴（すばる）をはじめ、双子、オリオンなどの星座がつぎつぎに上り、燦光を放ちつつ西空に移るさまはまさに荒星と呼ぶにふさわしい。山上のホテルの大玻璃戸に見る冬天のドラマはいかばかりか。芦ノ湖畔の小田急・山のホテル、新穂高温泉・山のホテル、白馬温泉・山のホテルなどにも連想が及ぶ一句。

容よく箸を使うて雑煮餅

正月、お節料理や雑煮を食べる時に欠かせない「祝い箸」は、折れにくい柳の木から作られ、縁起の良い八寸（二十四センチ）の長さで、両端が細く真ん中が太くなるように削られている。食事の際には箸の中央部分を持ち、箸先から一寸（三センチ）の部分を使って箸先を汚さずに食事をするのがマナー。片方を神様が、片方を人間が使うとされる祝い箸で、作法に従って食べる雑煮の味はまた格別の味わいである。

巫女舞の巫女の寒さを御覧ぜよ

巫女舞は巫女によって舞われる神楽の舞の一つで、祭祀を司る巫女の上に神が舞い降りるという古代の神がかりの儀式がもととなり、それが様式化して祈祷や奉納の舞となった。白衣（小袖）・緋袴・千早・水干・白足袋の装束に身を包んだ巫女が太鼓や笛、銅拍子などの囃子に合わせて、鈴・扇・笹・榊・幣などの依り代を手に舞い踊る様は優美だが、小雪の舞い込む舞殿にあっては寒さもまた一入であろう。

伝来の皿と親しむ松の内

松の内は、普段は離れて暮らしている家族が集まり、客人も増えることから、日頃は納戸の奥に鎮座している家伝の皿が表舞台に登場してくる。料理を盛り付けるための比較的大振りな「大皿」「盛り皿」、自分用に分けて取るための「取り皿」「銘々皿」、醤油や薬味を入れる「手塩皿」「薬味皿」……。代々伝わる伝来物ともなれば、それぞれに祖先の息遣いが感じられ、しみじみとした感慨が伝わってくる。

復元の平城京を冬の月

平城京は、今から一三〇〇年ほど前に日本の都として栄えた場所で、壮麗な都城に一〇万人以上の人びとが暮らしていたとされる。中核施設である平城宮は現在史跡を利用した国営公園に指定され、復元された朱雀門、第一次大極殿、同南門（復元中）、第二次大極殿、東院庭園などが「平城宮跡歴史公園」として整備・保存されている。凄まじくも美しい冬の月が照らす宮跡には其の上の大宮人の影が仄見えるようだ。

ゆずり葉

◆季音二月

檜　鼻　ことは

受皿に陶の匙おく葛湯かな　　境　延昭

とても穏やかな日常をお過ごしの作者の姿が浮かびます。葛湯はとろとろとした独特の食感と風味があり、寒さが厳しいおりなど、優しく体を温めてくれます。

実際、葛は血行を促進、また消化を助ける効用があるため、古来より重宝されてきたようです。お使いになられた陶の匙は、手作りの温もりを感じる品の良い匙であったことでしょう。温かい葛湯、器や匙を丁寧に扱っていらっしゃるご様子から慎ましい幸せが伝わってくるよう。拝読し、心が落ち着く思いがいたしました。

奥嵯峨や時雨るるも佳し二人旅　　森本早苗

渡月橋の辺りより足を進めると、やがて人もまばらになり、藁葺き屋根の民家や古い町並みが見え始めます。落柿舎より、二尊院、祇王寺、化野念仏寺、愛宕念仏寺あたりまでの散策は実に楽しいものです。忙しい日常から解放された御二人での散策は、殊の外心地よく、いつまでも心に残る時間であったことでしょう。

旅をされたのは時雨のころ。雨を表す言葉は四百四十語もあると教わった覚えがあります。日本語の持つ情感豊かな語彙の多さには驚くばかりです。若いころは、旅をした時など、「雨って嫌だな」と思うことが多かったように思いますが、最近はそうでもなく雨が嫌いではなくなりました。雨が似合う町もあるように思います。時雨の奥嵯峨、情感豊かな描写に感じ入りました。

風呂吹や屋台の椅子を詰め合うて　　丸山マスミ

夜の灯りが点るころ、仕事の帰り、あるいは何かの会合のあと、少し身体を温めて帰るには、うってつけの場所が屋台であるように思います。既に先客でいっぱいですが、それでも、詰め合って席をつくってくれる、そのような暖かさがあ

るのも屋台です。

さて、何をいただきましょうか。寒い夜ならば、まずは風呂吹き大根を。素朴ながら大根の持つ自然の美味しさが存分に感じられる一品。亭主や隣の客との会話も弾み、とても一合ではおさまりそうにありません。楽しい屋台の夜を堪能させていただいた一句です。

立冬や軒を寄せ合ふ伊根の家　　高島寛治

伊根の街並みは、まるで時がゆっくり流れるよう。日本海に面した細長い入り江に沿って並ぶ舟屋の姿は素朴で旅心を誘います。「軒を寄せ合ふ」と句にありますように、家々が密接して並んでいるため、通りを歩いていると、まるで時間が止まってしまったような感覚に包まれます。

作者が伊根に旅されたのは初冬のころ。春や秋の日本海はとても穏やかですが、冬の日本海は様相を一変し、海は色濃く、時に荒れた波が岸辺に打ち寄せます。「軒を寄せ合ふ伊根の家」の措辞は、自然の厳しさに耐える伊根の家々を描写しているかのようでもあり、絵心があるならば絵画にしてみたい光景です。

渡月橋わたりきる間の時雨かな　　横山君夫

花のころ、紅葉のころの渡月橋界隈は黒山の人だかりと言うことばが決して過言ではない賑わいとなりますが、掲句に詠まれた渡月橋は、道行く人もまばらな静かな佇まい。

渡月橋の袂には、「琴きき橋跡」と刻まれた石碑があります。平安の頃、高倉天皇が寵愛した琴の名手小督は、平清盛の怒りに触れ嵯峨野に身を隠します。天皇の悲しみは深く、源仲国に小督を捜させます。仲国が、名月の夜、嵯峨野を訪ね、いつしか、法輪寺辺りまで来て馬を止めると、何処からか、かすかな琴の音が聴こえてきます。それは唐楽の曲「相夫恋」、帝への想いを奏でた曲であったと伝えられています。

「わたりきる間の時雨かな」という美しく静かな措辞に、「儚さ」や「切なさ」を感じ、小督の物語を思い出した次第です。

三島忌や夕陽に映ゆる二重橋　　染谷風子

戦後の日本文学界で異彩をはなった三島由起夫。小説だけではなく、戯曲、随筆、詩など幅広い分野に於いて作品を残しました。日本の伝統的価値観や文化に対して強い愛情を抱いていた作家であったように思います。

皇居へと続く二重橋は、ある意味、日本の伝統文化・価値観を象徴する場所であり、夕陽に照らされたその光景は、時間が止まったかのように美しさ際立つ光景です。

三島への追悼の意と、二重橋の静謐な情景が印象的な一句です。

季音雪

余寒　鈴木康世

矜恃など持たぬこの身の余寒かな
さよならが両手に残る余寒の日
為せばなると心に決めし春立つ日
淡くとも長き交友梅の花
数式を解く楽しさの春の宵

加太淡嶋　十倉和子

荒磯風つよき玉垣若布干す
雛流し待つ雛たちよ眼を逸らす
たまさかの男気掛り針供養
をみならの後髪引く焼さざえ
雛流し花束そっと引波へ

湖と海　鳥羽和風

蜆汁雨美しき水月湖
鯉大き竿の撓りに木の芽風
止め椀は湖の賑はひ蜆汁
焼き蛤ずずと汁吸ふ東尋坊
素潜りの鳥羽の海女見る伊勢参

医学書　永野史代

北窓開く父の医学書黒光り
返答はいつもあひまひ霾ぐもり
北窓開く裏山の風もろに受け
船頭の艪を漕ぐ音や春浅し
渡月橋歩けば春の時雨かな

螢烏賊　星野和葉

春の雪烈しピアノの音はげし
眼裏に大輪咲かせ牡丹の芽
大吟醸酌む沖漬の螢烏賊
酢味噌の酢少し甘めに螢烏賊
目ン玉皿に三粒ころがる螢烏賊

口笛　町野広子

勤行の末席に座し寒鴉
寒鴉人の心を読む素振り
欲しいのはどの色ですか寒鴉
口笛の寂しき音色猫柳
風鳴きて二月の民話館恐し

待春　茂木和子

足早に遠のく雲や余寒晴
広びろと光遍ねく春山河
春時雨なほも寄り添ふ道祖神
水温む文字の歪みし広告塔
水温む犬をお供に郵便局

丹波篠山　森本早苗

城山は如月の黙五万石
丹波篠山山椒ピリリと牡丹鍋
春浅し黒豆珈琲香り立つ
山笑ふデカンショ節の流るる町
三味線草更地の増ゆる武家屋敷

春の雪　山中みどり

咲き初めし花に降る雪君逝けり
杯掲げ微笑む遺影春浅し
三月や旅立つ君に紺紬
君送る木遣り一本締め春の雪
柩持つ揃ひ袴纏春浅し

乾行賦　網野月を

艶冶とも見ゆかへるさの鶴唳けり
馬齢重ね帰雁の数に指ををる
引鴨や代はりに日和問ふてやる
ふるさとへ念ひを馳せる残る鴨
来る季は緑黛であり鳴戻る

光芒　石井喜恵

長考の一手冴返る盤上
薄氷や光芒はしる水の皺
薄氷を跳ぶ爪先揃ふスニーカー
そこはかと言ふ白魚の動くさま
白魚の皿におまけの一掬ひ

青き踏む　井上燈女

踏青や思ひ思ひに牛動く
牛舎から大き黒牛青き踏む
リハビリの一歩が百歩青き踏む
啓蟄や世に置き去りの常夜燈
啓蟄や世の片隅に尼の寺

冴返る　大橋廸代

十二神将の二人は跣冴返る
寒鯉の競り場の濡れに爪立ちて
みぞおちにギターの余韻冴返る
愚鈍なる右脳にひびく春の雪
梅東風や男と鷗うきうきす

擂粉木　石山かつ子

白絹をまとふ木乃伊や冬果つる
万屋の軒に擂粉木山笑ふ
催馬楽（さいばら）を奏づる春の巫女の舞
山焼の合図は狼煙峰攻むる
山焼の煙は雲を風を呼び

水温む　大村節代

春風や茶髪にしよか銀髪か
いそいそと俄巡礼水温む
春時雨裾を絡げて駆け抜ける
水温む磨かれてゐる手水鉢
春月の波の間に間に光り増す

無為　小倉倭子

立春の松原並木を一直線
芭蕉像の草鞋の裏の春埃
幸不幸思ひ方ひとつ葱の花
一人居のほのかに香る夜の梅
ジャズを聞く無為の窓辺や月朧

のどか　栢尾さく子

爪切つてもらふ倖せのどかかな
うつろふ世まざまざと見て春寒し
老いてなほ学ぶ寒夜の窓灯り
雛人形羨しと思ふ寄りそうて
梅古木なれど咲く気の蕾抱く

寒の水　菊池ひろこ

母似とや寒の水張る洗面器
犇めきて金色となる福寿草
結び目の多き品々松の内
松日影射す縁で焼く雑煮餅
塗り箸へ餅の重さや雑煮椀

料峭　五明昇

余寒なほ宥めて開くる農具小屋
冴返る梁くろぐろと典座寮
水温む撒き餌に躍る鯉の群れ
大利根に銀のたてがみ猫柳
止め椀に水菜の香る京泊り

安来節　境延昭

水温む泥鰌をどらす安来節
耳鳴りと紛ふ鐘の音余寒かな
棟上げの祝詞朗朗春きざす
酔ひ醒めの喉の渇きや余寒なほ
天心の日輪を呑む野火の煙

春近し　島津初花

先駆けて水踊り出す鵜の瀬川
春を呼ぶ叩く湖面へ魚踊る
梅が香に小屋の小舟が出て来たる
碑の文字を静かに流る春の雨
早咲きの椿を折りて師を偲ぶ

春来たりなば　椎野美代子

湖は大地の眼春を呼ぶ
人騒を潮騒ときく藤の浪
たましひのふらりふうらり春の風邪
春の雲母乳豊かなおかあさん
早春や生絹光りの鏡の間

季音月

雛飾る　松井由紀子

コンビニの薄氷しだく暁の客
道なりに行けと野仏春の風
淡月を浚はむばかり春疾風
老店主と日和よろこび桜餅
鏡花全集在りし書棚に雛飾る

待春　大場順子

紐を組む春待つ色を重ねつつ
伐折羅大将かつと目を剝く余寒かな
梵鐘の余韻にひそむ余寒かな
雪虫這ふ源流の水迸り
野に摘みて花菜尽しの夕餉かな

光春めく　梅澤佐江

艶やかに日矢射す京の雪しぐれ
紙鍋の紙より白き白魚よ
母子像春まだ浅き影を曳き
万葉の防人の空鳥帰る
巫女舞の鈴振る光春めけり

仲春　池田雅夫

仲春や陽光に開け放つ窓
風向きを変へ曼鑠と山笑ふ
春泥に月の光の白きかな
瞬ける猫の移ろひ春ならひ
対岸の船の灯りや叢霞

野焼く　松宮保人

白梅や年縞眠る湖の色
白魚の眼万個と汲まれけり
土手焼くや煙に紛れ誰かゐる
野良猫の場所知り尽くす日向ぼこ
若狭井へ十日の旅やお水送り

椿　原田秀子

茶室へと続く敷石落椿
心なき風が介錯落椿
口遊むゴンドラの唄紅椿
花街をしのぶ縁（えにし）や冬の梅
寒梅や若き庵主の白き脛

風花　森川義子

風花の舞ふ寺町の昼さがり
格子戸の軒ひつそりと春時雨
京言葉はんなり夜の梅匂ふ
鈍色の丸薬三粒寒の水
ジグソーパズル未完のままに冬終る

川面明り　丸山マスミ

メトロノームの刻むリズムや冴返る
余寒なほ京の町家の通し土間
遠流の島波音高き余寒かな
土手青む川面明りの沈下橋
観音の踏み出す気配春灯

岬（みさき）廻（み）　荒井倶子

岬廻の風哭くところ水仙花
眦に波きらきらと野水仙
ナースよりバレンタインの日の注射
地獄図のやうな炎や野火たける
蕗味噌を食みふる里の話など

語呂合せ　正木萬蝶

東京にモスクの在りて雪しぐれ
雪しぐれ骨片ひとつだけの葬
余寒なほ乙巳の変の語呂合せ
幸せの少しざらつく余寒かな
追分や踏み出す方に春の雷

風の形　檜鼻ことは

長旅を終へて駅舎の雪明り
冬の湖風の形を残しをり
狐火や無縁仏の多き寺
新海苔や土地のことばの柔らかく
白魚や刺し子織りなす麻模様

赤きシャッポ　内田恵子

如月の赤きシャッポに鼓舞されて
朝鏡の紅き口紅春浅し
節穴からの世界は広し初鶯
金平糖のかはいき突起蘆の角
精霊の舞ふてる広野草青む

春の雪　西浦千枝子

下校時の帽子に白し春の雪
番犬に一声かけて梅を見に
故郷の山春雪被り神々し
此処よりは幅員減少梅の花
ドクターヘリ二月の空をゆつくりと

赤城山　近藤徹平

冬の果風神寝入る赤城山
咲き初めを競ふ路地裏冬の梅
北国の番屋の火鉢掻き余寒
冬終る路地裏はしやぐ三輪車
祝儀とぶじよんがら酒場の春の宵

猫柳　上戸千津子

猫柳岸辺の風と共演す
金縷梅の藁葺きぐるり輝かす
裏山の開発に鳴く寒鴉
鉛筆の五角に願ふ道真忌
春時雨走れど寺鐘追ひ越しぬ

梅白し　青木鶴城

無機質の避難所暮らし蜆汁
春の雷畏敬の友の孤独死を
拍手に成就のゆくへ梅白し
マドラーを和装の女将春浅し
韻文に詫びと寂びあり利久の忌

移動性高気圧圏　日髙道を

人通り寂し中山道の余寒
春まぢか觔斗雲ならひとつ飛び
マネキンは着替への支度春近し
移動性高気圧圏草青む
菜の花の荒川土手に人の声

仕舞湯　野口和子

梅開く産泰様の小社に
仕舞湯に四肢を伸ばして紀元節
請求書春の切手の貼られ来る
春めくや町に一軒寿司暖簾
食ひ違ふ会話もどかし虎落笛

春を待つ　井上玲子

千切れ雲流れ何処へ春を待つ
暮れなづむ空は水色春浅し
蒼天へ枝を張りたる冬の梅
山門に香りゆかしき冬の梅
みづみづし水菜を食めば生気みつ

春の雪　大塚茂子

春ともし衣桁に明日の袴かな
陽だまりに強き影あり八重椿
裏道といふ静けさの藪椿
助産師の合格通知春の雪
春の雪豪華花魁（おいらん）脚さばき

浅き春　飛永鼓

早春の無人駅舎に幟旗
生返事ばかりしてゐる春炬燵
梅咲くや湖水の縁の村に住む
助手席の夫の居眠りのどけしや
野を焼きてコーヒー飲みて空見上ぐ

希望　福田千春

寛解は希望のことば春立てり
番傘に丸十の紋雪時雨
雪しぐれ相合傘の京の旅
北窓開きわたくしの澱飛ばしたり
北窓開く「まつくろくろすけ」浮遊する

麗姿　熊倉千重子

待春のマネキン纏ふ萌葱色
遊具の象南を向きて春を待つ
富士山の麗姿つくづく春の旅
サッカーボール蹴り合ふ親子下萌ゆる
下萌に足裏ムズムズするやうな

蕗の薹

松山清子

紅梅の香に包まれて地蔵堂
梅園は名士別邸薫り満つ
春昼や紙飛行機のよぎりゆく
如月のここも工事か迂回せり
庭園の隅にひつそり蕗の薹

☆

☆

特集 夢のありよう——俳句と夢
巻頭作品10句
星野恒彦・雨宮きぬよ・伊藤政美
山尾玉藻・野木桃花・仁平　勝
三村純也・櫂　未知子

俳壇
5月号
4月14日発売
定価1000円（税込）

巻頭エッセイ
関　成美

八木 健 選　滑稽俳壇

特別寄稿——赤尾兜子論……藤原龍一郎
四季巡詠33句〔第Ⅳ期〕…鈴木しげを・名村早智子

連載
季節の移ろい～二十四節気…大木あまり
俳人の住む町……浅井陽子・八木　健
編集室の風景……ろんど俳句会
二度目の俳句入門……長谷川　櫂
旧派の俳句……秋尾　敏
知ってるようで知らない俳句用語…井上泰至
今月の句……春燈俳句会

俳句と随想12か月　安田のぶ子・矢野景一

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

季音花

初春の河原　保坂翔太

樽酒に木槌の一打初明り
初富士を酒の肴に酌み交はす
年玉の多寡をグラフ化する子かな
初春の河原隕石めく欠片
数の子やにしん御殿の残る町

ナースの手　笹本啓子

勝鬨の歌をきりりとラガーたち
春遅し鯉向きを変へ泥煙
春寒し血管探るナースの手
かたかごに憩ふ山路や昼さがり
早春や勝利の騎手の鞭高し

桐箪笥　石田慶子

雪時雨肩に重たき夫の傘
風花や赤い帽子の老婦人
境内に豆の残り香春立ちぬ
バーテンの差し出す水や春の宵
北窓開く母愛用の桐箪笥

料峭　石川理恵

寒晴や古刹の鴟尾の光りたる
余寒あり寺までは徒歩二十分
料峭の先づ蜂谷（こめかみ）をおそひくる
沈丁花が咲いたよ返信無用です
沈丁の香のお零れはいづこより

春待ちて　河野はるみ

雪時雨願ひは一つ天満宮
相傘よそつと腕そへ雪時雨
組紐の色艶やかに春隣
紅き梅囁くごとに香放つ
ほろ酔うて身の上話春の宵

捨て小舟　曲淵徹雄

寒晴の鉄橋わたる「金太郎」
冬ざれや古利根川の捨て小舟
とめどなき日の斑のゆらぎ寒の水
春一番撞木の逸る時の鐘
島を発つ汽笛に残る寒さかな

春一番　横山君夫

百までは矍鑠たらむ寒の水
早々と内定通知春一番
儀仗兵春一番にたぢろがず
春一番夕星ひとつ置き去りに
雪虫や水音山のをちこちに

春菊の香　渋谷きいち

綺羅星の降るや今宵は冴返る
冴返る薪割る音に応ふる犬
春菊の香やアグリノートの一ページ
女騎手鞭入れてバレンタインデー
通り名のままの逢引月おぼろ

大和三山　染谷風子

冬ばらやフランス窓の先は海
古佛に古拙の笑みや冬の梅
寒晴や湾の彼方に芙蓉峰
立ち漕ぎのポニーテールよ春近し
手庇の大和三山春近し

冬から春へ　越田栄子

冬深し妙趣の庭の美術館
深呼吸寒紅梅の香を満たす
ドリップの泡ふんはりと春隣
椿の葉すべり落ちたる春の雪
命まだ燃えてゐさうな落椿

偲びて飾る　梅澤輝翠

母縫ひし着物ほどく日針供養
春寒し骨董市の火鉢に火
美形より力が勝る猫の恋
紫式部偲びて飾る桃の花
春遅し赤のヒールを出して待つ

雪の山　西幅公子

勝景や朝日に光る雪の山
子らの歌ひびく分校福寿草
籠に干す白魚浜に潮風
薄氷や押し花のごと葉を抱く
棕櫚の葉をゆらす大風遅き春

蕗味噌　森和子

蕗味噌と地酒を抱へ留守居夫
蕗味噌や断酒はやはり明日から
蕗味噌や間合程好し共白髪
すぐそこと言ふ道遠く春寒し
春寒や服薬の水なみなみと

寒明くる　寺内洋子

墨の香の立つ写経の間二月尽
ずしり重きあんぱん買うて梅日和
玄関の隅に居座る余寒かな
太陽の恵みの嬉し寒明くる
花菜道運転免許返納す

早春賦　瀬戸雄二郎

沈丁花母の歌ひし早春賦
数寄の庭香をはばかりて沈丁花
沈丁花未だ生きてをる釣瓶井戸
沈丁の香の中へ朝帰り
沈丁の闇に別れし人想ふ

水菜起つ　下川光子

吹き降りの京の空こそ水菜起つ
水菜ひと束母の手ばかり塩加減
春禽や木木の目覚めを促せり
合格発表また確かめる春ショール
眼力の猫に負けたる余寒かな

イヨマンテ　松島寛久

アイヌの熊は神様イヨマンテ
氷湖に丹頂の舞ツーショット
鐘つき婆今が幸福日向ぼこ
良寛坊虱と縁に日向ぼこ
深雪に裸足の振鈴永平寺

初みくじ　田中章嘉

跡取りも絶えて田畑に初日射す
新居買ひ若き夫婦の初詣
初みくじ鼓動高鳴り大吉を
初午や巫女は狐の面を付け
初午や王子に祠今に有り

浅き春　宮﨑チアキ

億万の煌めく星や冬終はる
そぼ降る雨を厭ふ項や余寒なほ
憂ひ秘む小さき黒目の白魚(しろを)かな
嗄(しはが)るる声を夜道に春を待つ
山の裾水はちよろちよろ浅き春

薔薇の芽　山戸美子

薔薇の芽やはや女王の品格を
退院を知つているのか薔薇芽吹く
合格に用意周到大宴会
入学の祝用途に個性あり
寒明けやノースリーブの帰国子女

春の日　綿貫ひさの

梅林へほいしよほいしよの二十段
梅が香は幹よれよれも馥郁と
春色やひとり楽しむ知らぬ街
独語して本棚漁る春の昼
街角の延命地蔵春夕焼

寒鴉　鈴木玲子

寒鴉小田原城を席巻す
寒鴉工事現場に思案顔
北窓を開き朝餉のパンケーキ
北窓を開けて川面の眩しさよ
春立ちぬ水天宮へ腹帯を

風光る　葛城千世子

高校生の昼夜逆転春うらら
春の風邪飲物ばかり手を付ける
改札口を行き来遣り水フリージア
風光る駅長帽の神妙児
出迎へは徳利五本の霞草

伊万里橋　野村美子

山焼やご神火運び松明に
山焼くや山肌黒に伊豆の里
梅の香や舞妓のさらふ舞扇
春を待つ着物の柄は万華鏡
春灯の秘窯の里や伊万里橋

春寒し　髙橋満耶子

加勢鳥は神の化身ぞ小米雪
鼻歌は夫の合図や春の風
沢山のナース転職春寒し
「知らんけど」の噂話や浅き春
両肩のインコ居眠り春セーター

☆

☆

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2025年5月号

特集 おらが里の季語 ～郷土を詠む
郷土の季語を詠んだ俳句とエッセイ！
北海道…尾村勝彦　山形…鈴木正子
茨城…大竹多可志　石川…中西石松
三重…谷口智行　高知…亀井雑子男
福岡…千々和恵美子

〈グラビア〉俳句界NOW　大橋一弘

特集 初学のころ ～私の俳句の出発点
○私の初学の「こころ～エッセイと俳句3句
池田澄子　今井聖　四ッ谷龍
成田一子　中本真人　神野紗希
○俳句を始めたいと思う人たちへ
～俳句実践のススメ　久保純夫
○「初学」のその先へ　櫂未知子

発表
第17回文學の森賞
第26回山本健吉評論賞

【注目の句集】松林朝蒼『水声山色』

連載 宮坂静生　青木亮人　栗林浩　坂口昌弘　ほか

「俳句界」投稿欄　一流選者11名！充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

現代俳句鑑賞

網野月を

春を呼ぶ手巻き仕掛けの玉手箱　鈴鹿呂仁

（『俳句四季』2月号・巻頭句より）

上五の「春を呼ぶ」は勿論自然の現象であり、人為には及ばないものなのである。ではあるが、「手巻き仕掛け」ということから作者の行為が少なからず「春を呼ぶ」ことに貢献しているように思えるのである。気分の問題かも知れないのだが、自らの行為によって自らの心持ちをただそうとする気構えが感じられる。他に「春一番瀬戸に鎮もる隠里」がある。

朝日子を翔け白鳥は天の花　高﨑公久

（『俳句四季』2月号・巻頭句より）

早朝に「朝日子」の光りの中を飛翔する白鳥が「天の花」のように見える、「天の花」になったということであろう。命の新鮮さと生の厳しさを同時に感得する一句である。

クレソン残し乙な女のひとり客　山本鬼之介

（『俳句四季』2月号・季語を詠むより）

この作者には独特の世界観、創作世界が展がっていて、その創作世界の中にペーソスも諧謔も取り込まれているのである。こうした熟達の作句の中に将に鬼之介砲炸裂といった感がある。いやそのような不細工な破壊的な感覚ではない。むしろ、鋭細な小柄が飛来した感覚と言った方が良いかも知れない。

蹇の杖の先なる鹿の子百合　小倉蒼蛙

（『俳句四季』2月号・この世の眺めより）

「蹇」は登山道を歩き疲れ切った状態を言っているのだろうか。「杖の先」に可憐な「鹿の子百合」を見つけた時の癒しが滲み出ている。主人公の視線の先が、つまりは「杖の先」ということである。他に「みんなみんな霧の中から出てこいよ」がある。

東武より西武あかるしバレンタインデー　村越敦

（『俳句四季』2月号・春なれやより）

池袋駅の東武デパートと西武デパートのバレンタインデー用のチョコレート売り場を「……より……あかるし」として比較して見せている。所謂気付きの句であるが、滑稽と諧謔が横溢していて、また社会批判的な側面も感じられる。他に「春セーター腹の星条旗が伸びる」がある。

知床を遠島影や秋深む　田中千穂
（『俳句四季』2月号・四季吟詠より）

知床を遠くから望むと、かすんで島影のように見える。その遠くかすんで見える島影のような知床に秋の深まりを感じることが出来る、と解釈した。上五の「……を」の使用が絶妙である。

カムチャッカよりアメ横にたらば蟹　丹羽真一
（句誌『樹』2月号・歳晩より）

地名ばかり三か所が入れられている句も珍しいだろう。「カムチャッカ」「アメ横」は直ぐに分かるのだが、「たらば蟹」は鱈の漁場で獲れる蟹のことで、蟹の名前の由縁はやはり場所を表している。「歳晩」に納得させられる一句である。他に「べい独楽の夫婦のごとく弾きあふ」がある。

遠き目に温められる冬銀河　宇都宮華水
（句誌『形象』537号・形象作品より）

本来は寒寒として冴えて見える筈の「冬銀河」が遠目に見るとかえって、温められて見えることよ、と解釈した。上五中七の「遠き目に温められる」には何ら合理的な背景はない。座五の季語「冬銀河」と取り合わされたとして解釈しても同様に合理的な解釈は成立しないのである。取り合わせではなく、「冬銀河」を修飾すると解釈しても同じである。作者の思いに解釈が及ばなくとも実に魅力的な作品である。

しばらくは日差に凭れ石蕗の花　大木満里
（句誌『都市』2月号・青桐集より）

小春日の小景を活写している句である。中七の「凭れ」の主語は何であろうか。座五の季語「石蕗の花」とも解釈できるのだが、作者が「日差に凭れ」ながら石蕗の花を見ている、もしくはそこに石蕗の花が咲いているとも解釈できるだろう。どちらにして作者と石蕗の花が日差しの中で小時を楽しんでいるのは間違いはないだろう。他に「落葉踏む心落ちつくやうに踏む」がある。

冬山家繕ふやうに咲く茶かな　堀込学
（句誌『鬣』2月号・きやしないより）

山家の景である。茶畑というような整えられた立派な設えではなくて、庭先に茶の木を植えている程度であろう。殺風景な山家の景の隙間を埋めるように茶の花が咲いている。中七の「繕ふやうに」が言い得て妙である。景や事柄を言語にする際の感性に独特なものを持った作家である。他に「あなたがゐるから私が減つてゆく」がある。

兄弟の同じ角度で冬に入る　小野裕三
（句誌『青山俳句工場05』2月号・作品より）

兄弟間で共有するものは「同じ角度」ということであり、つまり兄弟であっても個々別々の個性・属性を有しているということが、大前提になっているということである。しかも「冬に入る」ということは立冬限定のことなのである。韻を踏むことやその他特別な定型詩の技巧を用いることなく、句意の中に詩の本分を探求しようとする句である。

『水明誌』を繙く（水明二月号）

後藤よしみ（「鷗座」「小熊座」同人）

復元の平城京を冬の月　山本鬼之介

平城京は現在、世界遺産に登録され、一帯は歴史公園として整備がなされている。朱雀門が復元され、メインストリートである朱雀大路が幅七十メートル、京の入り口の羅生門へと広がっている。そして、大極殿南門が復元している。京のあった奈良時代には、記紀と万葉集が編纂され、東大寺の廬舎那仏が開眼し、鑑真により唐招提寺が建立された。華やかな天平文化が花開いた。

一方では、政変により長屋王の自害、天然痘の大流行がみられ、この間に四度も都を移している。長岡京さらには平安京に遷都したため、わずか七十余年の時代であった。平城京百年の年に再遷都の企ても失敗に終わり、それから五十年ほど経つと京は田畑へと変わってしまう。京の興亡の記憶の地でもある。変らぬものは、京を映し出す月。京があった時代の華やかな建物群。そして、現在の復元途中の公園の史跡群を皓々と照らし出す。その月明りに、自害して果てた長屋王の声、そして防人や苦衷を味わった民草の声が立ち上がってくる。冬の月が骨太の句を引き締め際立たせている。

歩をなくし英雄伝説吟ずれば　網野月を

作者月を氏の「なぞなぞ俳句」に挑戦である。辺境伯領とは、中世ヨーロッパの辺境地帯の領地とされる。一連の三句目に「ノースポール」とあるが、アルジェリアや地中海にみられる花から、バルセロナなどのスペイン辺境領であろう。カール大帝のスペイン遠征の際、ブルターニュ辺境伯のローランが戦死している。一連の二句目の「儚き騎士」とは彼のことか。

ローランは、中世・ルネッサンス期の文学の聖騎士の筆頭に置かれている。有名な「ローランの歌」は、この最後の戦いをテーマにしたものである。そこでは、聖剣や愛馬が登場し、吟遊詩人に歌われ、ダンテの『神曲』でもふれられている。また、戦地のカタロニアでは、ローランは伝説の巨人となっている。

月を氏は、昨年九月号の巣鴨界隈の句で高柳重信の名を詠んでいるが、重信は「大宮伯爵」と自称し、句集『伯爵領』ではその地を巡礼して句にした。月を氏はどうであろうか。昨年八月号に〈葉隠に螢死ぬこととみつけたり〉とある。「英雄伝説」を声に出せば、史実のローランの壮烈な死に行き当たる。現代も戦世。伯爵たる氏はその思いに歩を止めるのである。

水明創刊 95 周年

記念特別作品募集

記念全国大会･記念祝賀会のご案内の通り、水明創刊 95 周年を記念して、下記の要領で俳句･エッセイ･評論の各部門の特別作品を募集いたします。

選考委員以外は何方でも応募できますので、奮ってご投稿下さい。なお、受賞者の表彰は令和７年９月 28 日の記念全国大会にて行います。

応　募　要　領

【応募資格】　選考委員を除く全ての水明会員。

【応募部門】　①俳句作品：30 句（表題を付す）（応募用紙を発行所迄ご請求ください）
②エッセイ：１篇（400 字詰原稿用紙５～ 10 枚）
③評　　論：１篇（400 字詰原稿用紙 15 ～ 20 枚）
◆①は応募用紙を使用。②③はタテ書きＢ４判 400 字詰原稿用紙を使用する
◆文字は楷書で丁寧に記す（鉛筆書きは不可、黒ペンを使用）。ワープロ、パソコンによる原稿も可
◆いずれも未発表作品に限る
◆最初のページの１行目に表題（タイトル）と氏名（俳号）を明記する
◆複数部門への応募も可

【応募締切】　令和７年５月 25 日
（令和７年４月１日から受付開始）

【送付先】　〒 330-0064
さいたま市浦和区岸町４－ 10 － 21 水明発行所宛
※「記念特別作品」と朱書する。

【選考委員】　主宰・副主宰・大村節代・石山かつ子・石井喜恵
◆選考委員各自の選考結果を基に厳正に協議し、受賞者を決定します。

【授　　賞】　俳句・エッセイ・評論各部門に授賞します。
正賞１名：賞状と副賞５万円
（但し、受賞に値する作品がない場合には該当なし）
準賞若干名：賞状と副賞２万円
（但し、受賞に値する作品がない場合には該当なし）

◎ご質問・お問い合わせ
実行委員長　網野月を（080-7580-0208）へお願いします。

水明創刊 95 周年記念事業　実行委員会

俳誌望見

梅澤輝翠

「菜の花」

令和七年一月号　通巻七三五号

主宰　伊藤政美　発行所　三重県四日市市

昭和三十八年三月、山口いさをが三重県四日市市で創刊。平成十五年四月、伊藤政美が主宰継承。「俳句は自我と伝習との調和の詩である」をモットーとし自然と親しみ、日々を楽しく過しております。とあります。

表紙は目の覚める様な菜の花色一色で緑色で菜の花と書かれてあり、本当に菜の花畑の中へ誘われる様な気持でページを捲りました。

三籟集1　主宰句二十句より五句

酔芙蓉その色のままでゐてほしい
よく鳴るので秋の風鈴吊っておく
呟きは本音草の実はただこぼれ
鵙の贄きちんと食事してゐるか
帰り花きつとあそこで待ってゐる

一句目、酔芙蓉は朝は白く昼はピンク夕には赤になる一日花その色のままゐてほしい、どの色なのでしょうか。変わるその都度の三色すべてであって欲しいという事でしょうか。

二句目。もう秋なのですがよく鳴っている風鈴ははずさずに吊っておきましょう。なんて大らか、自然でいいなァー。

三句目、ふとこぼれた言葉それは本当に本音であった。目の前に草の実もただこぼれる、これも草の実の本音であるかと。

四句目、鵙の早贄の光景をみて鵙を心配して話しかけてお られる。本当にそう思いますよね。優しいお人柄。

五句目、この句はとても意味深であります。読者一人一人の解釈に委ねたいと思います。

「天の森集」より二句

秋深む雨の後には風が吹き　高尾田鶴子
花野径花野のつづくところまで　中尾節子

「当月集」より二句

沖の神島その沖を雁の列　海野さちこ
魚の跳ぶ音のしてゐる良夜かな　大屋かよ

「同人集」より二句

履歴書の青きインクや神無月　榊原ゆみ
かりがねや人は家へと帰るなり　鈴木みよ子

☆令和六年度菜の花俳句賞発表

「作家賞」　津矢田豊子の句の中から写生の道をひたすらにとし、

平賀節代氏の選んだ感銘句

足裏に西瓜の種や盆の果
黒光りする階段も雛の宿
裏門から入る末社や神の留守

「同人賞」　赤塚えつ子の句の中からあたたかき人とし、

小津由実の選んだ感銘句

照らされて冷たき色となる桜
法要に見知らぬ縁者春の雨
届けたり届けられたり豆ご飯

「同人賞」　宮田かつこの句の中から風音が風追ひかけてとし、

成木幸彦が選んだ感銘句

里桜会ひに行かねば会はぬまま
鯉幟風が本気になってくる
雨の日は雨の音のみ峡の冬

受賞者宮田かつこ氏のコメント。

「楽しくやりましょう。そうでなければ続きませんから」。主宰の言葉を元に無理せず自然体で楽しく俳句をしてきましたとの事。優しい主宰のお言葉。まさにその通りと思います。菜の花のどのページを開きましても、自然体で優しさ満載を感じました。どこまでもこの優しさを貫き通していかれます様、これからも楽しみにさせて頂きます。

山本鬼之介　選

水明集

さいたま　小林京子

沼面渡る風に光明初弁天
蔵の隅絹糸古りたる手毬かな
跳ねつ返りの振袖姿成人式
減らず口病めば減るなり寒やいと
病床の加湿器昼夜低周波

播磨　進

オリオンを通り抜けたる最終便
正月や溢るる靴を揃へたり
初日の出触れ合ひし手に未来あり
元旦や肩まで浸かり生演歌
初空や樫の梢に鶯立つ

さいたま　飯田忠男

百万石の加賀の雪吊り地球吊る
淑気満つ久伊豆の杜孔雀鳴く
焼き葱を首に巻きつけ早六日
寒梅に己が来し方問はれけり
黒門に今朝一輪の白き梅

寺町知子

枯木星話し相手のいらぬ夜
絨緞に膝並べをり四姉妹
白鳥や頸に鋼を秘め憩ふ
異国より戦の塵帯び白鳥来
枯蓮やぴたぴた歩く鳥の列

清水桂子

絨緞に乗りて浄土の見学に
音読の「天声人語」霜の朝
食積や母の手作り今一度
朝食の常に戻りて松の内
凍て道の石蹴とばして下校の子

皆川更穂

寒鰤をどつと投げ込み氷締め
玉砂利が醸す旋律淑気満つ
腑の縮む急降下して初寝覚
寒暁に号砲を待つ欅かな
もさりもさりもさり雪降る山の里

冬の水釣り人ひとり影映す
セーターの淡きふくらみ手につつむ
独り身の背中を過る隙間風
残照に葉牡丹やがて赤錆ぶる
冬の山我が魂の帰る場所

さいたま　元田亮一

佐渡島流刑の地にも春近し
無彩色の夕べに溶くる寒鴉
糠雨や紅色にじむ寒椿
厳寒の空掻き回すクレーンかな
先駆けて季を告ぐるや寒の梅

菅原真理

結ひ頭勇み立ちたる寒泳ぎ
会はねども賀状がつなぐ旧戦士
冬薔薇を挿してパーティー赴むかむ
枯葉散る若き兵士の命散る
鞘当ての大岡裁き石蕗の花

反町　修

淑気満つ化粧回しの揃ひ踏み
冬晴や丸き地球の見ゆる丘
富士を背に光る江ノ島冬日和
澄まし顔じよじよに解るる初句会
水仙や別れのことば口籠る

岡田宣子

母の味たどり雑煮の出しをとる
初夢や禅問答を果てしなく
ほろ酔うて初商の日の顧客
初化粧額の皺もご愛嬌
丑三つや聞こえてきたる雪の声

平塚　丸屋詠子

流れくるウィーンのワルツお元日
石段の三百余歩に今朝の春
干からびし田をゆく風や仏の座
住人もかくやふつくら寒紅梅
冴ゆる日の吉原大門風に泣く

越谷　阿部幸代

老梅の撓ふ樹形に淑気満つ
朝未(まだ)き朱の橋渡る淑気かな
能舞台シテの一声淑気満つ
観音は千手をひろげ春を待つ
妹の形見のコート春を待つ

さいたま　霜多光代

沖鳴りの島に孤峰や初弁天
石臼の搗き音かるし水車の寒
灰均す筋目ただしき寒さかな
淑気満つ熾火埋もるる囲炉裏かな
息白くもやひ解かるる掛り舟

伊奈　菅原卓郎

雪吊に蛇の目傘めくものもあり
電線のうなり聞く夜ののつぺ汁
父母の国籍ちがふ七五三
嬉しくて走りてをりぬ七五三
野尻湖の靄うき上がり一茶の忌

さいたま　池田珪子

淑気満つ明け六つ前の二重橋
掛軸の富士の高嶺に淑気かな
寒鰤の腹に張り付く値札かな
摩周湖や蒼さを競ふ冬の晴
寒椿ぽとんと落ちて恋終はる

新　暦文

冬晴や富士が大きく見ゆる朝
ふくよかにうら白なびき門暮るる
お年玉子供に成りて見たき哉
海鼠腸を食ふや元旦神々と
匂ひ立つ七草摘むやさ庭べに

加藤でん治

帰り来る子に初雪の薄化粧
初雪や手袋帽子飛び出せり
初雪に足跡残すつがひ鳥
号砲に新春駈くる福男
号令に手足の踊る運動会

篠﨑紀子

編みかけのセーター胸に恋終はる
大声のひとりカラオケ年忘れ
嫁ぐ日の祖母の手縫の手鞠美し
冬の朝掃き清めたる禅の寺
寒冷の光芒放つ格子窓

さいたま　綿引まりこ

春霞リアス海岸の棚田
ぶらんこの高みの景色見る子供
戸惑ひを仄と導く春の星
グランドへ迫り出す気勢草青む
畦焼くや煙立ち籠むる狭き谷

若狭　岡本祥子

去年今年貴様と呼べる奴はなく
歌留多飛ぶ公転時速十万キロ
初髪の娘の友と観る「フィガロ」
漱石のなづき声なす寒の水
冬苺家族は知らぬ父の過去

さいたま　森下山菜

平らかに広ごる丘に初日の出
平らかな海はまばゆし初日の出
新年のま青の空よとこしへに
新春にウィンナーワルツ届きけり
石庭に寒月映ゆる涅槃かな

山岸久美子

初鏡紅を指さうか指すまいか
こんなにも家族の増えて雑煮食ぶ
塗物を仕舞へば了るお正月
酒蔵の女杜氏の息白し
正客の太眉白く息白し

さいたま　本橋稀香

初夢や平和の答出ぬままに
年を経て母に似てくる初鏡
しきたりも言葉も失せて小正月
山茶花の白は画用紙そのままに
福達磨新しき絵柄身にまとひ

東京　畑宮栄子

雑煮食ふ昭和百年祝ひつつ
箱根路の駅伝見つつ雑煮食ふ
大声で家族呼び立て雑煮食ふ
塔庇朗朗響く歌留多詠み
寒の水無事を願ひて飲む船出

利根　倉田星歩

水突く水鳥もまたをりにけり
潜りたる水鳥にある気負ひかな
愛嬌を振り撒き潜る水鳥も
冬鷗立つ一本の係留鎖
水鳥の固まつてをり昔思ふ

さいたま　吉川拓真

碧天や崖一面の水仙花
淑気満つ紅白対の箸袋
淑気満つ日の出を浴ぶる双耳峰
寒暁や海鳴り橋を包みをる
寒暁の見入る者なき一里塚

さいたま　秋谷風舎

霜月訃報胸に住みつくふさぎ虫
初暦先づは医院の予約から
初春を刻む柱の古時計
冬の蝶黄泉の光を曳き来る
年の瀬や胸に住みつく懐古癖

杉戸　佐々木史女

年新た少し膨らむ畳縁
松飾り古道に面す印傳屋
年立つや万年筆の文字匂ふ
平積みの知らぬ作家の初読書
駅伝の歳旦凪ぎの太平洋

さいたま　田中弘子

厳寒の自販機の灯や缶コーヒー
厳寒やドライブスルーのオーダー
厳寒や朝刊の音三時半
色あせし国旗掲げる三が日
家じまひ募る思ひ出セピア色

竹澤和子

初霞客のまだ来ぬ渡し舟
立ち並ぶ古木の欅初霞
校庭の賑はひ眺むる仏の座
ほとけの座好きな仏を選びをり
良き名前もらひ受けたり仏の座

さいたま　門真宏治

湯豆腐や木綿豆腐派絹ごし派
湯豆腐や利尻昆布を鍋底に
女将には別の顔あり河豚の宿
三ヶ日動き続けて疲れけり
早早と日の過ぎ行くや松の内

若狭　山﨑郁子

うたた寝に言ひ訳いらぬ松の内
松の内少しの嘘をふたつほど
せがまれてタックル指南老ラガー
初富士の姿を宙に観る東京
汗ばみてラグビーボール空を突く

川口　新井のり子

寒鴉鳩に混じりて昼散歩
厳冬に厳選信濃ワイン買ふ
買初の絵本に魅了されたる児
買初の電気ブランに酔ひ痴るる
極寒やスケートリンクになる田圃

さいたま　小川洋子

木枯に抗ひ行くや杖の人
路地裏のここも銀座やおでん酒
柚子風呂に喜寿の鼻歌マイウェイ
外つ国の父と子はしやぐ柚子湯かな
虎落笛ベンチ一つの無人駅

さいたま　大熊健司

鶯や里に似合ひの声に鳴き
風暫し止みたる後の花吹雪
名刹のありのままなる糸桜
花散るや老いも若きも減りし村
花筏に乗りて小亀や川の旅

香田裕誌

初東風や飛び立ちさうな風見鶏
新年にシュトラウス聴く幸せよ
福達磨歳重ぬれど吾子は吾子
嫁が君テーマパークが終の家
初浅間ベールまとひてうつむきぬ

伊藤美津子

スケボーを操る少女初景色
振り降ろす指揮棒の先淑気満つ
箒目の乱れ冷たし禅の寺
煮凝をつつき比叡を景として
ひとり居の卓袱台点す水仙花

羽島秀子

乾風(あなじ)来て顔の無駄毛の伸びにけり
一陣の風にも変はる乾風かな
敗北は次の勝利ぞ枯はちす
シャッターの商店街を聖夜過ぐ
願はくは核なき世界十二月

さいたま　平野　楽

元湯まで五分の場所で初写真
大好きなひとの末吉初御籤
冬天へ積み上げらるるドラム缶
擂芋の小鉢をつけて女正月
貰ふなら七色の鈴春隣

大阪　遠藤人美

ぼろ市やブリキのおもちゃに見る昭和
落葉焚き禁止のおちば嵩高し
入試の日無事に終はれと祈るのみ
餅焼いて食ふそれだけで一日過ぐ
もてなしは丹塗りの椀の小豆粥

さいたま　駒谷行雄

黒豆の煮方のコツをスマホより
大盛りを孫に勧むるお元日
去年より一つ減りたる雑煮かな
落慶の寺の大屋根淑気満つ
鼻赤く塗りて別人新年会

若狭　松村笑風

早朝の冬菜ざくりとみづみづし
取り取りの冬菜ぎつしり荷解きて
鍋のふた開けて色良き冬菜食む
がさごそと思はせ振りな寒雀
寒雀発条仕掛のやう歩く

さいたま　緒方みき子

初夢の端に触れたる猫のひげ
焙じ茶を淹れて風花日和かな
土ものを土に寝かせて霜の朝
風花の舞ひ来る峡の野天風呂
初夢や目覚めて夢と知る朝

宍戸洋子

浅草寺のシンメトリーゆく明の春
初雀風雷神の門のうへ
仲見世の売り子の声や初手水
演目にならぶ江戸文字今朝の春
日だまりのパントマイムや春隣

石関六弦

託せぬと母の自慢の冬菜畑
朝食に冬菜三種をたつぷりと
神木に受け止められて寒雀
寒雀朝日に影も賑やかに
園庭で一緒に遊べ寒雀

所沢　飯室夏江

言の葉も少し桃色初句会
産土はるか今は焼かずに雑煮餅
冬うららこつくり車両独り占め
初句会弾む足もてホームへと
綱引けど老犬ゆるり冬うらら

吉川　杉浦千祐

子育てが身に付く息子寒紅梅
数多ある嬰児の絵本買初に
色取り取りで競ふ駅伝二日かな
駅伝や厳寒なれどランニング
桜島噴煙あげて春近し

さいたま　森下美智枝

北峰に日の明け初めて淑気満つ
美酒満つる切子ガラスの淑気かな
杣道がほのかに明り水仙花
月島の路地に気品や水仙花
丹精の甲斐の光や「天然氷」

前田夏野

温もりに首を埋めて寒雀
寒雀翳りゆく陽に眼を閉づる
ひとり居や寒雀らが呼び交はし
賑やかに餅の申告十四個
雑煮餅長く伸びては今日の幸

東京　山中いちい

仏の座小さき宇宙へいざなはれ
ひと歳のひと日の主役仏の座
初霞赤き鳥居の見へ隠れ
鳥一羽沼の主なり初霞
年重ね下仁田ねぎを含みをり

さいたま　今西　操

山の辺の万葉歌碑や仏の座
畦道を飛び立つ鳥や仏の座
銀輪の風きる小道仏の座
野天湯に猿の親子や初霞
雪女はにかみながら立ち去りぬ

石井直子

赤き色含みて硬し冬芽かな
仏の座虹のたもとで待つ犬よ
辻地蔵足下に数多仏の座
女体社へ続く階初霞
友の住む北国いかに初霞

三浦真由美

道すがらご利益給ふ仏の座
亡き母に見守らるるや仏の座
初霞新都心より富士に向く
初霞立ち入り歩む馬籠宿
散りまがふ山茶花寄すや朝ごとに

木谷葉子

寒雷を遠くに聞きつ厨事
単線の駅突き抜くる虎落笛
虎落笛梁むき出しの奥座敷
一年のできごと思ふ柚子湯かな
年新た靴ひもしかとまづ一歩

冬紅葉母に貰ひし漆塗り
日めくりをめくる指先年惜しむ
冬木立路肩にすつと教習車
山眠る友の癖ある一筆箋
冬林檎指にひやりと夜半かな

淑気満つ玉砂利踏みて前を見る
水仙や海鹿島まで母と行く
風受くる二重の花弁水仙花
人力車行きかふ川辺寒椿
三星のラーメン店に並ぶ寒

初東風や氷川神社に人の列
二輪車に双子の姉妹冬夕焼
コロナ禍や小正月も婆一人
遍路一人卯建の街の冬日あび
初富士や裾を支へるビルあまた

さいたま　湯浅　和

阿部貞代

小駒さち子

山下ユリ子

「第九」聴く穏やかならむ去年今年
七種のみどりの小籠店の先
初鴉いつもの場所に止まり来る
相見え無礼交はしてマスク顔
筆蹟の稍おとろへし賀状受く

連結音貨物列車の屋根の雪
新春や太極拳に支へられ
迎春や画室手狭に肖像画
寒梅や家の移ろひ見守りて
寒紅梅遥か故里訪ひにけり

手がそれて自由になりし手毬かな
手毬唄詞に隠れたる悲話ありて
よいしよされ垣根刈込み年新た
初富士やすべて受入れ不動心
隔離され一人食事の部屋寒し

春空に届けとばかりぶらんこ漕ぐ
花馬酔木大和路の旅懐かしき
春の空白雲バックに木木の枝
家家の透き間抜けくる春日差し
一輪の椿咲く道ひとり行く

東京　柳父はる

宮代　関谷多美子

さいたま　川島夕峰

東京　大島千恵

幼子のおませな口調年新た
年一度お目見えとなる雑煮椀
年新た厨の妻の声清き
冬の日や雨戸早ばや立ててをり
退院の日を待つ夫や冬ぬくし

さいたま　鈴木藻好

山眠るケーブルカーの見学者
渓流のさはさは流れ山眠る
枯蓮の造形あまた展示会
裸木の強き姿に背筋伸ぶ
電飾の夢の世界や枯木道

武田重子

初春や歩き初めなりよちよちと
歯朶添へて神の声聞き改たむる
初明り皆平等に差し来たり
夕時雨暖簾に駆け入るをとこあり
探梅行リュック背負ひて二人して

小山あつ子

葉のねぢれ念じて直し水仙花
水仙の袴は白し柔らかし
水仙の絶景果てて岬かな
花入れの水満満と淑気かな
箸置きのとぐろの干支の淑気かな

樋口元美

弾む子の笑ひに寄るや福の神
小さき手にこぼるる程の福袋
泥靴の小さき跡も初景色
畦跡に水面きらめく新景色
古希を過ぎ孫の笑顔はお年玉

草加　持永喜夫

水仙のほのかに香る仏間かな
太陽の光の中のふきのたう
せまき庭小さなあられ片すみに
二歳児の靴音ひびく寒の朝
寒の中肩よせあひて子猫かな

藤岡　加藤ナヲ子

寒空にお蔦の涙雨となる
師走にて風も何処かで忙しなく
朝起きて先づはストーブスイッチを
極月は仮名手本観て泉岳寺
討ち入りし武士の意気地や春の雪

東京　桐山遊童

新年やまぐろ値段に驚愕す
初雀餅確認に来る三羽
お神籤や海外留学子を想ふ
新年や草木勢ひ増しそむる
初御籤戦なき世を願ひつつ

和歌山　南條きわゑ

梵鐘の彩る響き初景色
朝日背に冬満月の朧げに
「美味しい」と家族の笑顔お年玉
彼の地へと響け尺八年始め
朝日浴びせりだす町家初景色

さいたま　鈴木香音子

お餅いくつ声が飛び交ふ朝の陽に
着ぶくれの母思ひ出す寒雀
クレーンに吊られ鉄骨冬空へ
年の瀬のロープに託す硝子拭き
寒雀居場所何処と思案顔

東　京　深沢りこ

塩の道枯野の奥に道祖神
虎落笛囲炉裏に滾るじやつぱ汁
大漁旗船待つ妻の頬被
ポインセチアへ水遣るひとの赤き爪
初夢や目覚めて消ゆる秀作句

さいたま　石黒由美子

灯台に続く小径の野水仙
百年の時をはぐくみ淑気満つ
永遠の杜メトロポリスに淑気満つ
新年の子どもの集ひ笑み溢る
集ふ子ら腕まくりして歌留多取り

稲野幸子

しなやかな指が踊るや歌留多取り
初風呂やほこほこ赤児受くるなり
大の字になりてほつこり女正月
成人式さなぎが蝶に変身す
むくつけき男の指の独楽回し

和歌山　嶋田洋子

枯野原生きゆくものの影ありて
冬の雨あがりてもゆる雲夜明け
初フルムーンと友よりライン霜夜かな
あかつきや影絵となりぬ冬景色
年新た我は我子は子の道を

さいたま　三森惠子

老夫婦命かけての雪下し
冬茶会両手で味はふ茶碗肌
大寒や川面切り裂く鵜の孤独
初烏品良く一声松の上
足場組まれてペンキの匂ふ去年今年

藤　沢　小島喜代子

華やぎの時経て如何に枯れ蓮
ひび割れし田にひれ伏すや枯れ蓮
煩悩を超えし姿の枯れ蓮
枯れ蓮平和祈りて頭垂る

さいたま　榎本道代

カーテンはタッセルを抜け春の風
陽炎は少女を包み空随意
永き日の金門橋に立ち止まる
メモ帳は盛り沢山の春の詩

所沢　関根千恵

箏曲の淑気満ちたる「春の海」
大王松の針に依代淑気満つ
初手帳に夫の付き添ひ多きこと
餅喉に詰らせ夫や三途まへ

さいたま　糸井しるく

冬晴や市民マラソンの地響
尖塔の先の明星冬館
ポインセチアと汝の唇だけの赤
風花や空の彼方に昼の星

上尾　室井早都子

新年や刺子の布巾に見つめらる
初耳ぞ何とレアかな嫁が君
賢きや牛に乗るとは嫁が君
初東風や手繰りて寄する子の願ひ

さいたま　小田三茅

朝まだき氷川の杜の淑気かな
鳰の漁飽かず眺むる放生池
水仙に逢ふたび屈む年少さん
水仙の波に岬も身ぢろぎぬ

横山礼子

水仙の列なす垣根猫の径
子に任せ寒餅切りの寸加減
脳トレに疾うの昔の手鞠唄
コンビニに多国籍人冬の朝

さいたま　篠原さよ子

怪獣と恐竜の違ひ新学期語る君眩し
次逢ふ日何咲きか賭ける桜の妖精

東京　中村まどか

水明通信

茂木和子

「雪嶺」欄は、何時も丁寧な鑑賞に感謝しております。三月号の「瓢」の実についてお知らせしたくて筆をとりました。

「瓢（ひょん）」の実と「瓢」の違い

瓢の実……蚊母樹（いすのき）（マンサク科の常緑灌木）で高さ二十米にもなる木
瓢の実は蚊母樹の葉に出来る虫瘤。
とても硬い。実の様な形の虫瘤を果実に見立て「実」と呼んでいる。
虫こぶから虫が出てしまうとそこに空洞が出来吹くとよく鳴る。

瓢……ウリ科の蔓性の一年草ユウガオの変種とされ果実から花入れや酒器など又賞玩用としても色々なものが作られている。
「瓢の実」「瓢箪の実」とは云わない。

作品鑑賞

山本鬼之介

蔵の隅絹糸古りたる手鞠かな　小林京子

一読して懐旧と夢のある俳句で、「蔵」という建物に愛着を持っている筆者にとっては、ついつい立ち止まって中を覗いてみたくなった作品である。

むかし女児が毬つき遊びに使っていた絹糸で包んだ綺麗な毬なのであろうが、今は色褪せて往時の面影を留めず、淋しげに蔵の隅にある。再び子供達の遊びに加わって、屋敷の床で撥ねて見たいと思っているかのようである。

山形県鶴岡市に、「御殿まり」と云う郷土民芸品があるが、これには三五〇年余の歴史があって、元々は出羽国庄内藩の藩邸の奥女中の手工芸によって始まったものであるとのこと。そして、明治以後もその技法が旧藩士の家に受け継がれて、現在では、「上野御殿まり教室」が脈々と華麗で緻密な技を教え伝えている。毬の大きさは大きな物では30㎝余もあり、絹糸で梅や菊などの花模様、亀甲や幾何学模様などの複雑な絵柄が施されている。毬そのものや、毬に吊り紐や房飾りが付けられたものもあり、硝子ケースに収められた立派な装飾品もある。

筆者が勤務していた会社の工場が鶴岡市にあった関係で、御殿まりには殊の外親しみを持っている。

オリオンを通り抜けたる最終便　播磨　進

冬の夜空に現れる名高い星座オリオン。ギリシャ神話の巨人狩人オリオンが出現したかのように厳冬の宵に真東から上がり、夜明けには真西に沈む。国内線の最終便の出発時間は、空港によって様々であろうが、19時から22時であろうか。晴れわたった夜空のオリオン星座を眺めていたら、星座を突き破るように航空灯を灯した旅客機が飛行してゆく。飛行機に乗っている人には味わうことの出来ないロマンチックな眺めであろう。作者の実体験であろうか。

百万石の加賀の雪吊り地球吊る　飯田忠男

作者の心意気がそのまま俳句になった豪快な作品である。金沢の兼六園にある雪吊りは有名であり、その時期になると、庭師による作業の様子を、観光客が興味深く観察している。実に華麗で見事な仕上がりに皆拍手を贈りたい心境ではないかと思う。厳冬期に、雪の重みで大切な松の枝が折れぬよう

に施す雪吊りであるが、各国に発生している異常気象や長引いている局地的戦乱など、人類が背負っている全ての不幸を解消したいと云う気持が、「地球吊る」なのである。

枯木星話し相手のいらぬ夜　寺町知子

夜間に、葉を全て落とした寒々しい並木道を行く人。夜道の一人歩きは淋しいが、誰かと連れだっていれば、黙々と歩く訳にもゆかず、気を遣うことにもなるので、一人の方が気楽である。枯木の間からちらちら見える星が、自分に語りかけてくれるようで、自然と力が湧いてくる。夜空の寒星が話し相手になっている。

絨緞に乗りて浄土の見学に　清水桂子

あの世とか地獄極楽とか、子供の時から気軽に口に出していたことを、高齢になるにつれ身近に考えるようになるのは当然のことかと思うが、この俳句のように明るく語られると、老後の人生が楽しくなる。千夜一夜物語のように、魔法の絨緞に乗って気軽にあの世の見学が出来たとしたら、人生観も変わってくることだろう。発想が実に面白く楽しい。

もさりもさりもさり雪降る山の里　皆川更穂

辞書に「もっさり」と云う言葉は載っているが「もさり」は無い。しかし、「もっさり」の意である「鈍重なさま」に相通ずるものかと思う。雪の降る状態を表現する言葉として、「深々」とか「こんこん」があるが、作者としてはこのどちらでもなく、音も無く重量感のある雪がどんどん降り積もってゆく様子を表現するのに「もさり」のリフレインを用いたのだと思う。人家の少ない山国の寒村。どの家も戸を閉ざし、戸外に動くものの無い大雪の夜の景色が俳句の中に実写されている。

セーターの淡きふくらみ手につつむ　元田亮一

えも言われぬ魅力に惹かれて選んだ俳句であるが、作者の句意を解き明かすのが難しい。上五から中七にかけての措辞から、セーターの胸の部位であることは判るが、セーターそのものなのか、それとも……である。長年の単身赴任生活から解放されたと聞いたので、おそらく奥様との温かな暮しの一端を詠んだものとの解釈に落ち着いた。

無彩色の夕べに溶くる寒鴉　菅原真理

空を染めていた冬茜がいよいよ薄れ、夜に入ろうとしている時刻である。まだ町の中に居る鴉か、それとも、森か山にある巣へ帰って行く鴉かは不明であるが、忍者のように夕暮れ時の景色に溶け込み、声だけがその存在感を示している。

「無彩色の夕べ」と云う措辞が、鴉が持っているイメージにぴったりである。

枯葉散る若き兵士の命散る　　反町　修

枯葉が木から離れて地面に落ちてゆく姿に、ウクライナとロシアの三年越しの戦争で戦死する若者の姿を重ねている。国は違えど嘗ての日本はもっと過酷な状態であったから、或る日作者の目に映った冬景色の一端と今の社会情勢とが結びついたのだと思う。「散る」のリフレインが利いている。

冬晴や丸き地球の見ゆる丘　　岡田宣子

有人宇宙船や宇宙ステーションからは地球の丸さを実感することは容易であろうが、地球上でそれを実感するのは難しい。日本国内でそれを体験出来る場所として、千葉県銚子市天王台の「地球の丸く見える丘展望館」がある。おそらく作者がここを訪れた時の体験句であり、一望千里の大海原を観て実感し、さぞかし感激したことであろう。残念ながら筆者はまだ体験していない。

丑三つや聞こえてきたる雪の声　　丸屋詠子

今は無いと思うが、むかし人を呪詛する「丑の刻参り」と云う風習があり、時代劇ドラマなどでそのおどろおどろしい場面を観ることがあるが、掲句の丑三つと丑の刻は現在の夜中の二時頃で一致している。季語の「雪」には傍題が沢山あり、「雪の声」はその中の一つである。雨音は雨がものに当たって発する音であるが、雪の場合は、雨のような音ではなく、雪の降る様を実見していてそこから感じ取る音であり、これが「雪の声」なのではないかと思う。その時刻から察して、尋常一様の声ではないと思う。

石段の三百余歩に今朝の春　　阿部幸代

高所にある神社か寺院の石段であろうか。あるいは何処かの城のものかも知れないが、その数からして容易ではない。季語から見て、これは初詣をした時の奮闘の記録だと思う。一月なのに身体がぽかぽかしてきて、気分よくお参りが出来たと思う。御利益があったことであろう。

能舞台シテの一声淑気満つ　　霜多光代

能始の舞台である。新年に相応しい「翁」か「高砂」を演じているのであろうか。厳かな雰囲気の会場に、きびきびとしたシテの声が行き渡る。演者も観客も快い緊張感に包まれた一日であった。

沖鳴りの島に孤峰や初弁天　菅原卓郎

言葉の選択に勉強の成果が現れている作品である。沖の波音がとどく島にただ一つ聳える山があり、山裾には弁天堂がある。横溝正史の最後の長編小説「悪霊島」を思わせる島でもある。名探偵・金田一耕助がひょっこり現れそうな島の雰囲気が、奥行きのある俳句に仕上げている。

電線のうなり聞く夜ののつぺ汁　池田珪子

冬の強風が吹き荒れて、戸外の電線が唸りを発している。虎落笛のようにも受け取れる不気味な音である。しかし、家の中では熱々の能平汁と地酒で団欒の座が盛り上がっている。里芋を中心に鶏肉・大根・人参・蒟蒻・油揚げなど、豊富な具材で腹が満たされ、程よく酔いがまわってくる。

寒椿ぽとんと落ちて恋終はる　新暦文

山茶花と違って椿は花ごと落ちる。その様は、潔くまた淋しい。燃えさかっていた恋も、終わりは椿のように呆気ない終焉を迎えるのだろうか。

海鼠腸を食ふや元旦神々と　加藤でん治

外見が気味の悪い「海鼠（なまこ）」の腸が「海鼠腸（このわた）」であるから、聞いただけで敬遠する人も居るが、両者とも実に美味で、酒には持って来いの珍味である。作者は、元旦に海鼠腸を先ず神棚に供え、その後おもむろに自分の口に運んだのであろうか。結構結構。

初雪や手袋帽子飛び出せり　篠﨑紀子

どか雪や豪雪は困るが、初雪にはどことなく明るいイメージがあり、歓迎したくなるような気分も生じる。この俳句にはまさにそのような味わいがある。冬に備えて帽子と手袋を買ったとすると、それに相応しい出番のチャンスが必要になる。初雪は、その出番にぴったりである。

編みかけのセーター胸に恋終はる　綿引まりこ

彼の姿を瞼に描いて入念に編んできたセーターである。それを知ってか知らずか、思いもよらず交際を断られた。絶望感でいっぱいの胸に、未完成のセーターを抱きしめた。

畦焼くや煙立ち籠むる狭き谷　岡本祥子

両側の山と山の間に広がる田で、畦焼きが行われている。若狭鳥羽谷の早春風景である。長閑な土地柄は昔と大きく変わっておらず、何時行っても我々の心を癒してくれる。

大宮から敦賀まで、北陸新幹線「かがやき号」で三時間。若狭がぐうーと近づいた。

水琴窟（水明集二月号鑑賞）

池田雅夫

秋晴の銀座四丁目の雑踏　北出久美子

晴れ渡って抜けるような秋の空である。かつては歩行者天国といって、休日の車道を歩行者だけに開放し、道は人で埋め尽くされたものだ。その象徴として銀座四丁目の交差点がある。「秋晴」というと郊外のひろびろとした景を思い浮かべるが、掲句は「銀座四丁目」として趣を醸している。

朝の露のせて野菜の御裾分け　宍戸洋子

採りたての野菜であろう。朝採りの「野菜の御裾分け」に悦んでいるのだ。「朝の露」にくるまれた新鮮な野菜は貴重である。おそらく葉物野菜であろう。春野菜、夏野菜、冬野菜と、四季それぞれに旬の野菜がある。さて、秋の野菜は何であろうか、などと詮索してみることも一興である。

眠る森どんぐり落つる音幽か　松村笑風

家の裏山の雑木の森であろうか。静まり返った秋の夜半。虫の音が力を失くすころ、あるなしの風に「どんぐり」が落ちる。気を鎮めていないと聞きとれないほど「音幽か」なのである。感性を研ぎ澄ましている作者の姿がそこにある。

小鳥来る天気予報は雨模様　竹澤和子

澄んだ秋の大空に北方から渡ってくる小鳥。また、山から里に下りてくる小鳥。いろいろな種類を称して「小鳥来る」という。美しい羽の小鳥が庭の木に来て群れている。今日の「天気予報は雨模様」であったが、晴天に恵まれたのだ。そして、その小鳥を間近に見られたことを喜んでいる。

遮断機の下りて遠くに流れ星　篠原さよ子

踏み切りの「遮断機」が「下りて」列車が通過するまでの時間は長く感じる。ただ無心に待っている。時は夜。遠くの空に一瞬、「流れ星」が過ったのだ。流れ星に願いごとを唱えたのだろうか。掲句を読み返してみると、流れ星のために遮断機が下りているかのように感じられるからおもしろい。

チャップリンのごと忙しなき石叩　杉浦千祐

「石叩」は「鶺鴒」のこと。長い尾を上下に振る動作が石を叩いているように見える。「チャップリン」は映画俳優で喜劇王のこと。当時は無声映画で、コマ送りの早回しのような動きであった。「石叩」の動きにたとえて妙。

ゆつくりと杖つく母に赤蜻蛉　高山みどり

高濱虚子の句に〈我静なれば蜻蛉来てとまる〉がある。立ち止まるほどではないが「ゆつくりと杖つく母」の背に「赤蜻蛉」が止まった。母の動作が目に浮かび、日常の生活を想像してしまう。それが読者の共感を得て記憶に残ってゆく。

単線の小さき浦浦カンナ咲く　中村留美子

「単線の小さき浦浦」から、伊豆半島を思い浮かべる。黒潮の影響で比較的温暖である。「カンナ」は中米原産の多年草で、葉が大きいことから和名は「ナバショウ」。燃えるような真っ赤な花の強烈さと小さな浦浦の静けさが対称的。

秋晴れて遠き赤城が近くなる　湯浅　和

口語俳句の効果が大きい。秋の快晴の日は空が澄み、抜けるような空で気持ちがいい。一般的に「――して――になる」という形は散文的になりがちだが、「遠き赤城が近くなる」という非現実的なことがらで正当化し、趣を醸しだしている。

野良猫の薄目開けたる秋思かな　小山あつ子

日溜りにのんびりと横たわり、「野良猫」が人を恐れるでもなく、ただ眠たそうにしているのであろう。「薄目開けたる」表情は「秋思」そのもので、愛着を感じたのであろう。

鉛筆を削り続ける夜長かな　駒谷行雄

夜の短かい夏を過ぎ、とりわけ夜を長く感じる秋。そんな「夜長」を最大限に活かし何かを執筆しているのだろう。半時もするとたちまち「鉛筆」の芯が減ってしまう。その繰り返しなのだ。単に鉛筆を何本を削っているわけではない。

時々は首をかしげて赤とんぼ　加藤ナヲ子

細かいところが観察されている。鬼やんま、銀やんまは頭を上にして棒などにぶらさがって止まる。「赤とんぼ」は突き出す棒や枝の先端に水平に止まる。動くものがあると注意深く眼で追うので「首をかしげて」いるように見える。

揚揚とメダル下げたる案山子かな　樋口元美

昨年はオリンピック・フランス大会の年で、日本人選手の活躍にめざましいものがあった。金・銀・銅の多くのメダルの獲得に日本中が湧いた。それを受け、「メダル」を「下げた」選手の「案山子」が立っている。頼もしい案山子である。

過疎の谷村守り人の案山子たち　稲野幸子

「過疎の谷」となった村は人口が減り、残り住んでいる人も数人しかいないのだろう。そんな寂しい村を「村守り人」となって「案山子たち」が並んでいる。その滑稽さがいい。

大村節代　選

鼓笛集

小流れの音軽やかに猫柳
せせらぎや水面に影の猫柳
生け花や鈍き光の猫柳

反町　修

妙齢のひと住む噂冬館
退院にポインセチアのサプライズ
着膨れて狙ふ連番前後賞

森美枝子

原生の森の精霊囀れり
春の浜護岸工事の果てしなく
杣道にくつきり足跡春の鹿

香田裕誌

草青む馬場潤ひて蹄あと
新馬赴ゆく調教軽き草青む
球を追ひスライディングキャッチ草青む

北山建治郎

もう見えぬ通勤電車の富士の雪
花冷えや臨時休業の喫茶店
「三婆」の幕間に見る桃の花

元田亮一

野仕事や鳥の日畑をひとり占め
青田風今日のコーラス無伴奏
梅雨明をもたらす一語ラブコール

篠﨑紀子

やきもちてふことば思ふや餅を焼く
焼き餅がぷうと息吐き肩落とす
供餅一寸ほどの願ひあり

山中いちい

セザンヌのタッチ長子の年賀状　関谷多美子
如月やをちこちに良き友在りて
旧友より届くメールやバレンタインデー

梅凛と阿吽の雉の坐す社殿　森下山菜
ワンと鳴くバレンタインの日のパンダ
玉くしげ箱を零るる雛飾

浅漬に残る糀の白さかな　池田珪子
粕汁にぶつ切りしたる鮭のかま
手の平にちよつと味見の蕪鮓

キャンバスの空色明し山笑ふ　霜多光代
春色の口紅にしてオペレッタ
水色のショールを舞はす不意の風

玉造り温泉一泊の旅楽し　佐々木史女
安來節どぢやうすくひは初めてと
大雪や空港に一機もなし連泊に

鼓笛集作品評

大村節代

小流れの音軽やかに猫柳　反町修
せせらぎや水面に影の猫柳
生け花や鈍き光の猫柳

春の季語柳は枝垂柳、糸柳、青柳等々、数多の種があり、世界では三〇〇種余と言われる。水辺に生えて、日本全土に分布する猫柳の名は、銀白色の花穂を猫の尾に見立てて名付けられたという。猫柳での三句はそんな様子を彷彿する。

着膨れて狙ふ連番前後賞　森美枝子

上五の季語着膨れてにより、年末ジャンボ宝くじの事と、ようく分かった。それにしても、連番前後賞とは、誰もが願う事を、季語と共に良くまとめて、感心した。お見事です。

原生の森の精霊囀れり　香田裕誌

一句目精霊囀れり　二句目春の浜の護岸工事　三句目の杣道に鹿の足跡等、春が沸き立つように、景が浮かぶ。

※いつもすばらしい句で、感心し、勉強させて頂いている方方の句に季語が無かったり、二つあったりでした。季重なりもかまわないと思いますが、鼓笛集ですので、やはり基本が大切と思います。

鼓笛集巻頭（三月号）

私の好きな一句（自句自解）　森下山菜

男みな素手で地雷を掘る花野

採ってくれる人は少ないが、自分では大いに気に入っている句である。

ジャン・ポール・ベルモンド主演のギャング映画「勝負（かた）をつけろ」で、受刑中の主人公が志願して地雷除去の作業をする。下手をすると手足が吹っ飛ばされるので、素手で慎重に掘り出す。一方花野の地雷は詩の神ミューズが埋めたもの。男たちは命がけで掘り出そうと躍起になっているという絵である。

誤植訂正

三月号に誤植がありました。慎んでお詫び致します。

○四三頁上段　正　さいたま　樋口元美
　　誤　和歌山　樋口元美

○四六頁上段　正「絨緞にまどろむ猫の夢ペルシャ」
　　誤「絨緞にまどろむ猫のペルシャ」

一般社団法人　現代俳句協会・会員誌

WEB版『現代俳句』（現俳ウェブ）

4月号無料公開中

※どなた様もご覧いただけます

記事一　現代俳句とは何か　第二弾
高橋修宏・林桂

記事二　評論賞競詠　外山一機・田辺みのる

記事三　一句誕生の現場　小西瞬夏

連載中　「百景共吟」（井上論天）とその鑑賞（小野裕三）、嘯風広場（栗林弘）、名句・名著の評論（松王かをり）、エッセー「翌檜篇」（貴田雄介・三宅桃子）　ほか

〈事務局からのお知らせ〉

いよいよ第六十二回現代俳句全国大会作品募集開始！

大会賞、新聞社賞、特別選者賞、秀逸賞など

今年は昭和百年に因んだ題詠もあり

応募用紙は「現代俳句」に綴込み等

WEBから投句可

※会員外の方も投句できます。

◎全国大会（表彰式）は十一月三日（月・祝）東天紅上野店

句集喝采

菅原卓郎

◆大竹多可志「デジャ・ビュ」　東京四季出版

著者略歴　昭和二十三年茨城県日立市生れ。昭和三十七年「かびれ」入会、大竹孤悠・小松崎爽青に師事。昭和四十四年「かびれ」同人。平成十四年「かびれ」主宰を継承。俳誌「かびれ」主宰。俳人協会評議員。同協会茨城県支部支部長。茨城県俳句作家協会顧問。

十年ほど前から作者は「千日回峰」と称し月に百句を作り続け、既に一万句を越している。デジャ・ビュとは、いつか何処かで見た風景が、今目の前で展開している。超不思議。

正体を見せぬ人をり女郎蜘蛛
明け暮れの何も変はらず胡瓜揉み
もう何も悔ゆることなし三尺寝
燃ゆるもの燃やし尽くして曼珠沙華

第二句、夏の定番胡瓜揉み。簡単な調味料で即座に作れて食卓の常連さんである。中七が言い得て妙である。第四句、曼珠沙華の燃え立つ様な花の色に、人間の深い情念を見ている。燃え尽きるまでとはなかなか真似は出来ない。

市街地にニセアカシヤの匂ふ夜
神域に雨降る音や七変化
悟られてならぬ事あり春の泥
一行の埋まらぬ手紙夜半の夏

第一句、花の芳香が夜の街に満ちて、人の心を潤している。しかし「ニセアカシヤ」の語感から街特有の胡散臭さが読み取れる。第二句、栃木の太平山は正に神域。磴千段の両側に七変化が群生している。雨の日は特に趣が有り、雨の音と共に鑑賞したい。視覚・聴覚共に満足。

◆勝浦敏幸「鉦叩」　喜怒哀楽書房

著者略歴　昭和二十五年埼玉県川越市生まれ。平成二十一年「和み句会」入会。平成二十二年「くすの木句会」入会。平成二十四年「爽樹」入会。令和六年「爽樹」代表。俳人協会会員。

作者の第一句集。川越地区を中心に活動されている。「情景俳句」を旨とし、多岐にわたる分野の作品が掲載されている。特に競走馬の句が多数見られる。

腹立つる些細なること炭を継ぐ
太箸や細事は問はぬ志
紙漉の水の雫の光かな
搦手の門より桜吹雪かな

第一句、ほんの小さな事に立腹しつつ炭を足していく。決して心中は穏やかではないが何とか落ち着こうとしている。

第二句、細かなことに右往左往しない気概は持ち合わせてはいるが、偶には揺らぐことも致し方ありません。

新茶淹れ恋の話の仕舞とす
老僧の眉毛は長く大火鉢
どの牛も陽炎となり反芻す
山神へまづ一献のましら酒

第二句、冬場の法事の後の導師との雑談中、ふと顔を見ると眉毛の長さに驚愕する。長生きの証しである。第四句、山祇への御神饌、猿酒とは何とも微笑ましく、神様も大喜びの事であろう。今年もこの山は平穏な日々を迎えられる事であろう。それとも酔い過ぎてご乱心かな。

網野月を選

山紫集

位牌堂を飾る穂長のみな反りて　松宮保人

裏白や押し問答も国訛り　篠原さよ子

母の手の拝むがごとく歯朶矯むる　横山礼子

歯朶飾る畳ひんやり鎮まりぬ　寺町知子

歯朶あかり裏山妻の眠る墓　渋谷きいち

裏白や口の達者は百寿母　青木鶴城

ヘアピンカーブ箱根うら白翻る　杉浦千祐

歯朶枯るる紙垂千切らるる夜半かな　元田亮一

裏白や寿司屋の嫁の握り飯　本橋稀香

裏白や昭和の習ひ守る家　荒井倶子

——以上特選

喜びを百万回も歯朶に告ぐ　南條きわゑ

歯朶を添へ四手引き立つや神の棚　西幅公子

裏白やふたりと一匹息災に　野口和子

裏白に朝日が当りここに幸　野村美子

裏白や夫婦仲良く生きるかな　畑宮栄子

裏白のミクロの世界神の技　原田秀子

明るい日陰歯朶青々と育つ　樋口元美

裏白は丸まり歯朶はピンと伸び　日高道を　歯朶飾り夫在りし日を目交に　森川義子

歯朶の葉のぴんと跳ねたり草枕　檜鼻ことは　いざいねむ歯朶の表の白むまで　森下山菜

歯朶反りて今日も乾燥注意報　福田千春　歯朶挟みお供へ高き神棚に　森下美智枝

神主の幣が踊りて歯朶揺るる　保坂翔太　歯朶供ふねがひ五つを唱ふなり　山岸久美子

のほほんと裏白の反り餅の罅　曲淵徹雄　悩み多き我が人生や歯朶茂る　山下ユリ子

裏白や一間に御在す神仏　正木萬蝶　かぎ針の編み出す花葉歯朶の影　山中いちい

裏白や土間にととのふ杵と臼　松井由紀子　裏白や病む夫支ふ友強し　湯浅　和

裏白や父母の健勝祈願せり　丸屋詠子　葉先まで線対称や歯朶長し　横山君夫

裏白や駒を指す手の指の反り　丸山マスミ　車海老の赤さ美し歯朶を抜く　吉川拓真

歯朶の葉の羽片織り成すフラクタル　皆川更穂　歯朶飾るいつも微笑む遺影拭く　綿引まりこ

諸向の光る青さや共白髪　宮崎チアキ　小糠雨吸ひて身震ふ歯朶の叢　秋谷風舎

歯朶一枚に土の匂ひ太古かな　持永喜夫　軸の元歯朶青々と餅の白　新　暦文

素通りの果に気になる歯朶の道　阿部幸代

おかざりの羊朶丸まつて開くシャッター　飯田忠男

裏白に山の香少し残りをり　池田珪子

北国や採りをく歯朶のねぢれくせ　池田雅夫

裏白の塵玄関に床の間に　石川理恵

裏白や屏風絵をゆく夫婦獅子　石関六弦

歯朶飾る明治生まれの祖母の采　石田慶子

歯朶加へ白の証や依代に　糸井しるく

歯朶添へて松かうがうし床の間に　井上玲子

裏白や終活ノート書きはじむ　内田恵子

天照大神乗る三方に歯朶　梅澤輝翠

群れ歯朶や刹那太古の風の中　梅澤佐江

大振りな歯朶飾りたる四畳半　遠藤人美

乾び反る歯朶に太古の風の音　大場順子

室内の乾く早さに歯朶縮む　岡田宣子

屋久島の歯朶を飾るや長屋門　加藤でん治

歯朶反りて身の潔白の白を見せ　上戸千津子

裏白や反り返り泣くまご娘　川島夕峰

裏白のちぢれ具合も吉かとも　熊倉千重子

歯朶買ふや曽て裏白裏山に　河野はるみ

歯朶伸びて緑の滝となりにけり　小駒さち子

鳳尾草番鳳凰絵図想ふ　小林京子

うらじろの日を経て丸る生き様よ　小山あつ子

三方や山の歯朶敷き海の鯛　近藤徹平

輪飾や裏白二本松二本　佐々木史女

年ごとに縮む身丈や歯朶飾る　笹本啓子

料亭の一角歯朶にこだはれり　篠﨑紀子

三方にシンメトリーの歯朶みどり　清水桂子

裏白や荒神棚の黒光り　下川光子

山のこゑ風のこゑ聴く歯朶密に　霜多光代

灯明や荒神棚の歯朶あをし　菅原卓郎

裏白や生家の重み改めて　菅原真理

本棚の隙間を埋む飾歯朶　鈴木藻好

工房の三宝に歯朶神さびて　鈴木玲子

豊けくと祈りを籠めて飾る歯朶　関谷多美子

歯朶の道峠越えれど歯朶の道　瀬戸雄二郎

神棚に蛭子大黒歯朶添ふる　染谷風子

裏白や傘寿と喜寿の比翼なる　反町　修

送迎は車椅子用歯朶にほふ　髙橋満耶子

お茶室の床のうらじろほのかな香　武田重子

歯朶の上白蛇の守り鎮座さす　田中章嘉

踏み入れること躊躇ひて歯朶の群　飛永　鼓

山紫集作品評

網野月を

位牌堂を飾る穂長のみな反りて　　松宮保人

飾り続けて日を経た為に「穂長」が全て反り返ってしまっているのである。それが「位牌堂」であることが句の主眼である。「位牌堂」に歯朶を飾り付けることが、宗派の伝統なのか、その地域の習いなのか、筆者には不明だが、日本であるからこその景ではあるまいか。遥かな昔から伝承されて来た、アニミズム的なものも感じ取れる。

裏白や押し問答も国訛り　　篠原さよ子

どのような「押し問答」であろうか。帰省した際の兄弟もしくは姉妹間の「押し問答」であろうか。その辺の解釈は読者に任されている。正月の際の出来事であろうから、深刻な言い争いではないだろう。子供の頃の出来事のお互いの記憶の相違というような他愛ない事柄であろう。上五の季語の「裏白」のイメージから、中七座後の句意を展げているように読める。

母の手の拝むがごとく歯朶矯むる　　横山礼子

お母様が祈る時のように手を合わせ歯朶の葉を挟んで、その縮まる様を直しているのであろう。何度も何度も挟み付けて直している景が目に浮かぶようである。

座五の「矯むる」の後には「母の手」が回帰して、上五に戻るというか、循環するような構成になっている。座五を「歯朶を矯む」というようにして終止形で止める手法もあるかも知れない。作者は敢えて上五に循環させたのであり、その分「母の手」が強調されている。

歯朶飾る畳ひんやり鎮まりぬ　　寺町知子

上五の「歯朶飾る」空間は、中七に「畳ひんやり」とあるので室内のことなのである。「歯朶飾る」空間については、筆者は御供を想定してみた。正月飾りの諸々が落ち着くところに落ち着いた後、将に「鎮まりぬ」なのである。

歯朶あかり裏山妻の眠る墓　　渋谷きいち

上五の「歯朶あかり」は特徴的な表現である。そして「歯朶あかり」は掲句の肝である。句の流れとしては、中七の「裏山」の前後で切れているようなリズムでもあり、意味的には「歯朶あかり裏山」「裏山妻の眠る墓」というように「裏山」を要として連帯しているような構成でもある。肝である「歯朶あかり」には神的な内容も感じ取れるし、作者の心の方向

性も感じ取れる。

裏白や口の達者は百寿母　　青木鶴城

上五の季語「裏白」は正月全容を意味しているように解釈できる。「裏白」という季語の懐の深さを感じずにはいられない。座五の「百寿」は誠に目出度いばかりであるのだが、中七の「口の達者」という健康そのものであることも加味されている。母と子の他者には決して入れない絆を感じる。一方で作者の母親に対する甘えも感じ取れる。つくづく羨ましい。

ヘアピンカーブ箱根うら白翻る　　杉浦千祐

「うら白翻る」のであるから箱根のターンパイクでもあろうか。一読して大胆な構成であることがわかる。中ほどに挿入した「箱根」の位置づけはどうであろうかということである。句は「ヘアピンカーブ」「箱根」「うら白翻る」に三分割することが出来るだろう。そしてその三つの部位をどのように組むかというパズルがこの句を成立させる命題なのである。細かい議論は省いて、結局中七座五のリズムを選択したことが成功の鍵となった。やはり型というのは韻文の命脈なのである。

歯朶枯るる紙垂千切らるる夜半かな　　元田亮一

夜半の風の強さを感じる句である。正月飾りの「歯朶」と「紙垂」の様態を写生することで、冬の寒気の厳しさと吹きすさぶ風の在り様を想起させている。上五と中七の始まる韻が「しだ」であり、また終りの韻が「るる」であることの技巧的な設えもまた見事である。

裏白や寿司屋の嫁の握り飯　　本橋稀香

中七の「寿司」と座五の「握り飯」の対照が愉快である。上五の季語「裏白」はこの句の場合、正月を意味しているのであろう。また「……や」切れ字を巧みに組み合わせて、作者の眼前の「裏白」と中七座五の多分記憶の中の事柄を取合せている。

御祝ごとの寿司と日常の握り飯の対照は、作者ご本人の境涯俳句的な側面もあるのかも知れない。

裏白や昭和の習ひ守る家　　荒井倶子

「昭和」の措辞は俳句では頻繁に使用されていて、既視感のある措辞である。加えて今年は昭和百年ということで、これからもよく見かけることになるであろう。掲句はその中にあって、よく見かける「昭和」ではなく、特異な「昭和」を引き出している。つまり作者の生きた「昭和」ということである。決して概念的な「昭和」ではないのである。ある意味で個人的なイメージが其処には含まれているであろうが、俳句の一つの在り方として十分に成立していると筆者は考える。何故なら、作者にとっては「昭和」なことなのである。

令和七年の「水明忌」が二月二十四日、浦和コミュニティセンター第十三集会室に於いて開催されました。

例年通りの水明晴れのもと「紫荊」と「当季雑詠」の兼題での二句の競詠に三十八名が参加しました。（申し込み四十名、欠席二名）

今回は事業部の小林京子氏の司会で開会。長谷川秋子、星野紗一、星野光二の三代の主宰に黙祷を捧げた後、主宰の挨拶を頂き披講へと移りました。

選句　主宰は多選
　副主宰は二〇句選
　雪欄作家は十句選
　一般は五句選

披講　日髙　道を
　菅原　卓郎

主宰詠

旧宅の梅に目礼秋子の忌
五代経ちたる裏門堅し紫荊

主宰選

三極（天・地・人）

天

昭和百年悠々と今日水明忌　茂子

地

桐箱の蓋をもたぐる雛人形　楽

人

春寒し無口の父の無口かな　翔太

超特選

朝東風や客も綱持つ地引網　更穂
春灯戯画を抜け出す猿・兎　マスミ
今はまだ陸で遊べぬ蛙の子　ひさの
黒髪の香りゆかしき春日傘　佐江
花蘇枋雛妓の髷に挿してやり　輝翠
草萌を蹴りシャドウボクシングかな　徹雄
住み慣れし街に見慣れぬ花蘇枋　道を

特　選

丁寧に生きて八十路や花蘇枋　喜恵
梅真白水明ブルーの空清し　栄子
紫荊今は昔の子沢山　京子

真つ青な空賜りぬ如月忌　義子
花蘇枋笑まふ皇女へ振る諸手　翔太
表札の墨字の滲み花蘇枋　徹雄
暮れ初めし街を揺蕩ふ春の雪　道を
君の樹と決めて偲びぬ紫荊　和葉
晩学の永字八法草萌ゆる　風子
花蘇枋祖妣の紬の作務衣かな　風舎
天平の色ふとよぎる花蘇枋　桂子
藁ぼつち仄かに咲くや寒牡丹　美子
美容室鏡に映ゆる花蘇枋　茂子
黒髪を解けば零るる秋子の忌　京子
花蘇枋読経の洩るる花頭窓　昇

普通選

屋敷林風の道しる紫荊　はるみ
まどやかな光の中の花蘇枋　かつ子
さよならの握手指切り花蘇枋　節代
眼差は地蔵のそれよ秋子の忌　月を
待春の不屈自画像無言館　公子
補聴器をつけ陽炎の芝を踏む　ひろこ
己が身の光まとふは花蘇枋　久美子
百千鳥五百羅漢も賑にぎし　輝翠
如月忌一年なんと早きこと　鶴城
紫荊街の舞妓の艶姿　修
通学路垣根の向かうに花蘇枋　美子
花蘇枋会ひ度き人に会ひたくて　倭子
畠に立つ絣の筒つぽ花蘇枋　延昭
春光の輝く世界いつの日に　チアキ
九十五周年先師見守る如月忌　喜恵
金髪を見馴るる街や秋子の忌　宣子
手弱女の艶めくうなじ花蘇枋　卓郎
無言館の声なき思ひ春の雪　真理
花蘇枋風と語らふ女学生　更穂
紫荊城址に鳩の含み声　マスミ
木の芽晴安曇野めぐる鳶の笛　昇
蒼天を功徳のやうに水明忌　義子
紫荊数多の紅紫こそばゆし　楽
真つ白な椿三輪水明忌　由紀子
松籟や汀を過る春ショール　和葉
妻恋ひの防人の歌花蘇枋　風子
柔らかき寝起きの髪や秋子の忌　風舎
追想や空き家の隅の花蘇枋　ひさの
乙女らの声の華やぐ花蘇枋　佐江
言の葉を織る機の音や如月忌　桂子
水明忌俳誌連綿春北斗　徹平

互選及び主宰選の披講の後、天・地・人の三極には主宰より色紙、超特選には短冊が授与され、互選による高得点者には水明より記念品が贈られました。

高得点者

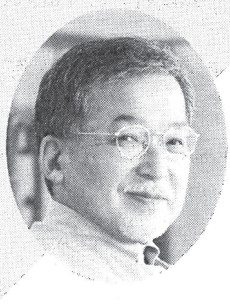
一位　五明　昇
二位　小林京子
三位　丸山マスミ
四位　石井喜恵
五位　曲淵徹雄
六位　皆川更穂
七位　染谷風子
八位　清水桂子

表彰の後、主宰より講評を頂き予定の時刻通りに終了しました。今回は初参加者が有りませんでした。新しい方の積極的な参加を期待したいと思います。

『俳句』令和七年 2025・3

クローズアップ

作品7句



昭和三十五年与野市（現さいたま市）生まれ。昭和五十八年「水明」入会、現在「水明」副主宰。Haiquology 代表。一般社団法人現代俳句協会常務理事。

セルフカウンセリング

来年の春には定年退職する。これからの一年をどのように過ごすか、自問しつつ自らの答えに未だ行き着かない。そして来春後は？　その時になったら分るよと先輩は言う。どうしたらよいのか考えたりしている。数年前までは俳句に没入できるであろうことを夢見ていたのだが、それ以前の心の安寧を先ず探そうと思う。

あと一年

網野月を（水明）

愛日や萎れて垂れる日章旗

寒明や空の青さに淀みなし

春まけて十七音のエントロピー

黄楊伐れば蘖ともに失せにけり

遣瀬無し遅日の白蛇舌を出す

春没日わが影映す白蛇の目

山笑ふ耄くる父のかたほゑむ

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
小林京子　報

予報士のトーン高まる余寒かな　亮一
北国の番屋の火鉢掻き余寒　徹平
伐折羅大将かつと目を剥く余寒かな　順子
遠流の島波音高き余寒かな　マスミ
腰紐のとりどり春の桐箪笥　由紀子
ツインタワー跡地紐育の春　京子
修験者の声音澄みきる余寒かな　卓郎
――以上特選

春時雨解けしままの靴の紐　延昭
財布の紐弛みばなしの節分会　はるみ
綾取りの紐が川・橋春の宵　徹平
紐解くさまにものの芽ほどけたり　稀香
そろそろと泳ぐ大鯉余寒かな　卓郎
故郷の訛忘れし余寒かな　京子
紐を組む媼の背に春動く　マスミ
余寒なほ錆びたるままの我が五感　喜恵
靴紐を強く結びぬ春の朝　亮一
新しき縄跳びの紐寒の明け　チアキ
モノクロの街に佗しき余寒かな　由紀子
紐育へ親善使節浅き春　節代
助手席に酒気ある余寒乗り込みぬ　千祐
紐を組む春待つ色を重ねつつ　順子
締め切れぬ財布の紐やバレンタインデー　和葉
足早に遠退く雲や余寒晴　和子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城　報

御仏の提げし瓶子に春の塵　竺仙
物差に母の旧姓針供養　〃
無機質の避難所暮らし蜆汁　鶴城
コンビニの袋遊ぶや春の風　〃
宍道湖にひとつ島影蜆汁　いちい
春風も迷ひ移設のハチ公口　千春
おむすび二つ椀は大振り蜆汁　慶子
春風の誘ひに乗らぬ重き尻　峰雄
川底の小石の裏に春の風　士史
春の風通過してます最寄駅　亜弥子
薄れ行く星くづ北窓を開く　妙子
チーズ切る研ぎたてナイフ春の風　みどり
――以上特選

紙飛行機ふはりと春の風に乗り　サカエ
春日浴ぶ曲がる腰撫で土起こし　りこ
蜆汁手作り味噌の講習会　慶子
スプリンクラーの水舞ひ上がり春一番　妙子
身を残す後めたきや蜆汁　峰雄
春の風「来たわ」の声は友の声　亜弥子
深酒の言ひ訳流し蜆汁　いちい
もののふを撫づる春風城の跡　敏江
黙もくと蜆食む子や汁残し　千春
地下ホーム水落つ音に春近し　竺仙
刃物研ぎの男饒舌春の風　みどり
颯爽とフレアスカート春の風　鶴城

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄　報

追分や踏み出す方に春の雷　萬蝶
さよならが両手に残る余寒の日　康世

飼猫の夜具に押し入る余寒かな　星歩
梵鐘の余韻にひそむ余寒かな　順子
島を発つ汽笛に残る余寒かな　徹雄
余寒なほなだめて開くる農具小屋　昇

――以上特選

余寒なほ耳になじまぬイヤリング　順子
幸せの少しざらつく余寒かな　萬蝶
余寒ある親指に頬ぬぐはるる　千祐
寝返りを打つ背に迫る余寒かな　星歩
一しきり牛の背をうち春時雨　雅夫
寒晴や古刹の鴟尾の光りたる　理恵
鷺一羽余寒の池に立ち尽くす　康世
休田に残る寒さを過る猫　徹雄
水温む撒き餌に躍る鯉の群れ　昇

第四例会（浦和）

石井喜恵
反町修報

冴返る梁くろぐろと典座寮　昇
止め椀に水菜の香る京泊り　〃
メトロノームの刻むリズムや冴返る　マスミ
吊し雲乗せて赤富士冴返る　行雄
京の町路（みち）は碁盤目冴返る　寛治
惣明や湖沼静かに冴返る　でん治
長考の一手冴返る盤上　喜恵

――以上特選

真夜中の門扉の音や冴返る　翔太
水菜鍋奉行の腕の見せどころ　行雄
水のみで育つ水菜よ歯応へよ　寛治
吹き降りの京の空こそ水菜起つ　光子
水耕の水菜栽培全自動　修
京菜洗ふ峡の湧水洗ひ場に　でん治
凍返る留年決めし孫むすめ　延昭
玉蔵院扉を閉ざし冴返る　玲子
さやさやと水菜立たせり流しもと　由紀子
要人の警護白バイ冴返る　暦文
お浸しの水菜に踊る花鰹　マスミ
テノールで神呼ぶ禰宜や冴返る　昇
紅を差す鏡の顔の冴返る　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

格子戸の奥の暗さや春浅し　宣子
指輪抜き水菜たつぷり洗ひをり　〃
春浅しシャベル戸口に並ぶ街　知子
淡緑の水菜の小鉢京好み　〃
甘やかき宵まだ遠し浅き春　千祐
母子像春まだ浅き影を曳き　佐江
松籟の白鶴城址春浅し　〃

――以上特選

昼月のごとほの透きぬ水菜あを　千祐
沿道の色無き木々や浅き春　宣子
気風良き水菜の音や朝の膳　知子
暮れなづむ空はみづ色春浅し　玲子
浅春や坊もてなしの薬草湯　義子
水菜買ふ金髪のひと富士額　はるみ
京菜のサラダ清しき今日の始まれり　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子報

艶やかに日矢射す京の雪しぐれ　佐江
城隠し城見せもして雪時雨　稀香
雪時雨遠く陽あたる海の面　ひろこ
方向音痴は日常茶飯春近し　詠子
雪しぐれ傘を傾げてすれちがふ　京子
梵鐘の余韻煙るや雪時雨　星歩
雪しぐれ骨片ひとつだけの葬　萬蝶

――以上特選

雪時雨竹林揺らす乱鴉かな　星歩
紅茶置く卓を灯して冴返る　ひろこ
天満宮に願ひは一つ雪時雨　はるみ
捌きたる魚に塩打つ雪時雨　稀香
茶屋町の紅殻格子冬日影　佐江
ゆくりなく酒盃重ぬる雪時雨　マスミ
身じろがぬ太公望や雪時雨　詠子
雪時雨肩に重たき夫の傘　慶子
番傘に丸十の紋雪時雨　千春
雪しぐれ相合傘を今すこし　千祐
日脚伸ぶ茶渋のついた夫婦碗　鶴城
リコーダーの「茶色の小瓶」春隣　京子
東京にもモスクの在りて雪時雨　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

啓蟄や追分節にかなふ道　鬼之介
おしやべりの止まらぬ鸚鵡春の昼　〃
折詰を完食したる春の宴　〃
身を残す夫を叱りつ蜆汁　月を
水馴れ棹花嫁のせて濠うらら　廸代
聖書よりしをりの舞妓解く春夜　〃
手に余る天金の書や春寒し　和子
墨の香の立つ写経の間二月尽　洋子
しまなみの島から島へ木の芽風　人美
加勢鳥は神の化身ぞ春の雪　満耶子
古雛や早く飾れと目で合図　きわゑ
相槌を上手く打つ猫春うらら　早苗

――以上特選

上方は上の上なり難波梅　月を
ずしりと重きあんぱん買うて梅日和　洋子
背守りのずつと揺れをり春コート　人美
鉛筆の五角に願ふ道真忌　千津子
搦手に反る野面積牡丹の芽　和子
風光る駅長帽の神妙児　千世子
二階迄開院祝ひ春爛漫　きわゑ
通行止の地蔵の辻や春の雪　満耶子
春炬燵夫の居場所は決まりけり　ノルン
春鮒釣なかの一人は女装なり　廸代
草萌ゆる二十五軒の仮設跡　早苗

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和七年二月二十八日現在―

藤澤喜久　30口
曲淵徹雄　20口
五明　昇　10口
丸山マスミ　5口
匿　名　200口
山本鬼之介　50口

水明忌より

日髙道を　1口
皆川更穂　1口
丸山マスミ　2口
石井喜恵　1口
綿貫ひさの　1口
反町　修　2口
清水桂子　1口

曲淵徹雄　2口
越田栄子　1口
大塚茂子　1口
西幅公子　2口
梅澤佐江　2口
菅原真理　1口
星野和葉　2口
保坂翔太　1口
河野はるみ　1口
岡田宣子　1口
元田亮一　1口
吉川拓真　1口

合計340口

※水明発展基金の二月号にご芳名の間違いがありました。
正　熊倉千重子…5口
誤　水野　興二…5口
心よりお詫びして訂正致します。

各地句会

りんどう俳句会（浦和）

春一番法堂百畳駆け抜ける　寛治
早々と内定通知春一番　君夫
野に摘みて花菜尽くしの夕餉かな　順子
雪虫の群るる地蔵のよだれかけ　翔太
待ちきれず勇んで出れば春一番　夕峰
夕波や島影うすれゆく余寒　徹雄
淡雪の肩にひとひら夕間暮れ　まりこ
箸で喰ふペペロンチーノ春一番　風子
夕星に種火埋めたる磯竈　卓郎

水明熊谷句会（熊谷）

啓蟄や腐葉土の山活気付く　秀子
「一力茶屋」に往時を偲ぶ大石忌　道を
啓蟄や菰外されて松欠伸　忠男
リハビリの一歩が百歩青き踏む　燈女
春寒し社の隅に力石　栄子
踏青や行先知らぬゴム飛行機　徹平
啓蟄の大地見つむる小食蟻獣　卓郎
夜櫻や隅田堤を人力車　風子
啓蟄や農婦いちにち鍬休み　茂子

たかんな俳句会（川口）

京言葉はんなり夜の梅匂ふ　義子
戸を繰れば庭の朽木に春時雨　のり子
表札に犬の名もあり春うらら　小麦
記念日の香かそけき梅二月　美智子
梅の香や急く足音を引き止むる　福美
時刻表梅の便りを待ちかねて　鶴城

若枝句会（浦和）

冬枯れの土撥ね除けて下萌ゆる　泰子
鶯や深谷シネマの赤煉瓦　貞代
鶯のこゑ透きとほる仮の宿　泰生
鶯の一声聴いて服選び　みどり
薄氷や夜半の散り葉を閉ぢ込むる　敏江

ミモザの会（横浜）

落椿湧水の堰紅く染め　栄子
顔あらふ水棘のごと春浅し　美千子
北窓開く母愛用の桐箪笥　慶子
北窓を開けて川面の眩しさよ　玲子
北窓を開き地球の熱を下げ　亜弥子
北窓開く裏山の風もろに受け　史代
北窓開く「まつくろくろすけ」浮遊する　千春

円卓の会（浦和）

水汲みは少女の仕事遅き春　京子
春寒し球団キャンプ熱帯びぬ　修
帰り道鞦韆に乗ることにする　亮一
姫役の銀幕女優針供養　翔太
最高のシャブリをバレンタインの日　道を
オーダーを愛するピエロ針供養　拓真
飴色になりし指貫針供養　卓郎
退場のバレーダンサー春の闇　月を
母縫ひし着物ほどく日針供養　輝翠
マドラーを和装の女将寒き春　鶴城

芽吹句会（浦和）

寝尽くして地中の生（とう）は春を待つ　修
淡き色誰より早く着て待春　富子
山裾の水はちよろちよろ浅き春　チアキ
御朱印は遊女春を待つ浄閑寺　弘子
富士山の麗姿つくづく春の旅　千重子
千切れ雲流れ何処へ春を待つ　玲子
春眠し軽き荷を持ち山手線　ひろこ
白梅の新芽びつしり開花待つ　久美子
遠山の影は薄れて春を待つ　道を

皐月の会（浦和）

ほにやと鳴くバレンタインの日の仔犬　山菜
他愛なき猫の仕草の日永かな　光代
亡き人にバレンタインのチョコ届き　珪子
山寺の千一五段冴返る　暦文
冬枯やむかしむかしの「とおりやんせ」　美佐尾
女騎手鞭入れてバレンタインデー　きいち
他愛なき謎々解けず梅の宿　更穂

若楠句会（浦和）

白梅や友への文に香を添へぬ　操
黒塗りの箸より垂るる白魚かな　京子
文鳥の呼べば応ふる春日向　葉子
薄氷はH２Ｏの厚さなり　風舎
白魚の生命まるごと食ひけり　直子
白魚の目黒々と見つめ来る　真由美
白魚や黒の艶めく輪島塗　鶴城
薄氷や皆鈍角の幾何模様　宏治

蝌蚪の会（浦和）

達人の技を伝へよ薄氷　風舎
水行の桶に薄氷割りにけり　元美
をちこちに囁く木の芽足留めぬ　秀子
薄氷の嬰の指先桜色　幸子
薄氷ぱくぱく光り近づきぬ　さち子
駆ける児の手には自作の風車　ひさの
痩せ枝に余る光や春立ちぬ　夏野
大山を過ぐれば富士に春の月　礼子
政局の山は動きぬ山笑ふ　しるく
山盛の日光責や猿笑ふ　月を
薄氷を目がけ踏みをる登校児　宣子

櫟の会（浦和）

下萌えの地上一寸彩れり　裕誌
墓じまひの土に下萌いのち見る　富子
手になじむ手帳となりて二月かな　文子
下萌ゆる摘めば命のにほひぞす　あつ子
壁打ちの少年一人路地二月　朋子
下萌に足裏ムズムズするやうな　千重子

芙蓉句会（浦和）

薔薇の芽や出窓に猫の大欠伸　税子
つる薔薇のアーチを揺らす芽吹き風　仁
薔薇の芽やはや女王の品格を　美子

俳句の手ほどき（岩槻）

淡路のぞむ舞子の浜や春の潮　延昭
巫女舞の鈴振る光春めけり　佐江
風花の舞ふ寺町の昼さがり　義子
山焼や祝詞朗朗大太鼓　徹平
舞扇匿すほくろや朧月　忠男
遠山火幼馴染は未亡人　翔太
山焼やご神火運び松明に　美子
名槍と舞ふ黒田節春の宴　桂子
春を呼ぶ庭の樹に舞ふ尾長二羽　久美子
切株に山焼きの人の小昼かな　卓郎
蒜山に父祖の雄たけび山火かな　幸代
阿蘇一望の山焼きの香や牛の鼻　知子
乱れ舞ふ初蝶追ふも忙しなき　チアキ
山焼きの合図は狼煙峰攻むる　かつ子

野ばらの会（浦和）

陽だまりに強き影あり八重椿　茂子
命まだ燃えてゐさうな落椿　栄子
海凪てつらつら椿心和ぐ　夏江
心なき風が介錯落椿　秀子
二軒目の湯めぐり浸みる牡丹雪　みき子

和歌山水明句会（和歌山）

荒磯風つよき玉垣若布干す　和子
一枚の枯葉閉ぢこむ手水鉢　道子
番犬に一声かけて梅を見に　千枝子
春の風邪飲物ばかり手を付ける　千世子
加勢鳥は神の化身ぞ小米雪　満耶子
石地蔵祈る杓の薄氷　きわゑ
花種蒔く眠れる土を起こしつつ　洋子
十二神将の二人は跣冴返る　廸代

雛の会（浦和）

白魚汁秀衡椀にたつぷりと　輝翠
夢に現る見知らぬ漢春うらら　はるみ
白魚食む母ゐる日和穏やかに　燈女
籠に干す白魚浜にうしお風　公子
薄氷や光芒はしる水の皺　喜恵
薄氷や幼き恋のくづれゆく　チアキ
紙鍋の紙より白き白魚よ　佐江

りそな俳句会（浦和）

人通り寂し中山道の余寒　道を
余寒なほ指のささくれ侮れず　寛治
手を繋ぎ園児散歩の畔青む　建治郎
草青む孫たち駆くる河川敷　勲
零れきてはしやぐ雀ら草青む　久美子
土手青む川面明りの沈下橋　マスミ
一歳の足取り確と草萌ゆる　雅夫

繭の会（浦和）

冴返る油断のならぬ二枚舌　夕峰
冴返る青雲将に冬を断つ　風舎
草萌の原に寝転び惑ひし日　和子
下萌やあの子に彼女できたかも　小麦
寒戻る子の赤き頬包み込む　伸子
冴返る酒場帰りの影法師　風子
飴切りの音のリズムや冴返る　留美子
風もなき雪解の朝の薄明り　寿夫
下萌や野に先んじて水辺より　月を
勝負師の確たる眼冴返る　京子
春雪の明石海峡光る浪　まりこ

新樹の会（浦和）

さんざめき焼野啄む鳥の群　徹雄
春の夜や下弦の月の照らす宴　修
残生をホップ・ステップ犬ふぐり　風子
春寒し廊下伝ひの奥座敷　道を
薄氷や数寄屋の庭に下駄の音　鶴城

小梅の会（浦和）

春寒や新作並ぶ和菓子店　隆文
雨あがるあらここかしこ春や春　恵子
土を割る無数の蕾春来る　隆然
春寒や千切れて久し猫の耳　進
針供養和針洋針母のこと　道を

櫻蔭句会（浦和）

春ともし衣桁に明日の袴かな　茂子
夕餉の香ただよふ路地や春灯　久美子
薄氷をしやりしやり急ぐ今朝の道　真理
大社詣朝餉宍道湖蜆汁　行雄
離乳食に満面の笑み春灯下　美智枝
春の雪足跡つづくけもの道　公子
春灯の秘窯の里や伊万里橋　美子
嫁ぐとう旧き言葉よ春灯し　多美子
別れ道あまた選り来て今日の春　由紀子
春の燈のこぼるる庭に白い椅子　幸代

若狭水明会（若狭）

跡振り返り振り返り雪を掻く　鼓
寒の水五臓に沁みて命継ぐ　友夏
寒の水父はもとより医者嫌ひ　和風
除雪車の村中ひびく安堵かな　祥子
青銅の龍が吐き出す寒の水　初花
宝船六男一女の母ありて　寛久
はらわたを洗ふが如く寒の水　郁子
臥し父へ寒九の水を届けたり　笑風
鮒さばくまな板滑る寒の水　八重子
真夜中の除雪の唸り地響けり　保人
やれやれの空の青さや雪を掻く　ことは

野菊の会（与野）

人騒を潮騒ときく藤の浪　美代子
広びろと光遍ねく春山河　和子
紅梅の香に包まれて地蔵堂　清子
一人居の仄かに香る夜の梅　倭子
金平糖のかはゆき突起蘆の角　恵子
春禽や木々の目覚を促せり　光子

神戸大池句会（神戸）

春浅し古書の煙の散りぢりに　千津子
厳寒の懸け舞台舞ふ鬼二匹　早苗

青葉の会（浦和）

春遅し庭の草花まだ蕾　美紗子
式服の掛けてあるなり春障子　真理
春遅し無言館への旅惑ふ　美智枝
早春の式日の朝白ドレス　美子
春遅し巡拝者待つ札所寺　啓子
棕櫚の葉をゆらす大風春遅し　公子
春遅し部屋では花の競ひあひ　洋子
片栗の花山裾に和紙の里　和子
片栗の花に天使が舞ひきたる　輝翠

鶴川山百合句会（鶴川）

よく見れば邪気無き眼寒鴉　雄二郎
生業は早起きといふ寒烏　月を
残照を帯びずに枝の寒鴉　史代
勤行の末席に座し寒鴉　広子
国道の真中に一羽寒鴉　由美子
眼ぢからは弱し寂しげ寒鴉　千春
昨日より黒の増したる寒鴉　萬蝶
期限少し切れたる菓子も小正月　理恵
高みより睥睨したる寒鴉　美千子
寒鴉羽膨らませト長調　まどか
寒鴉小田原城を席巻す　玲子

あゆみの会（浦和）

海風が散らす香や野水仙　和
手捻りの一輪挿しに野水仙　啓子
岬回の風哭くところ水仙花　倶子
観覧車眼下四方に水仙花　重子
養生が夫の口ぐせ寒卵　藻好

きざきサークル（浦和）

荒城につのる松籟春寒し　昇
包丁研ぐ風に骨あり春寒し　光子
蕗味噌を食みふるさとの話など　倶子
蕗味噌をトーストに乗せ朝ごはん　和
木曽谷の日差し閉ぢ込め蕗の味噌　由美子
春寒し友入院の知らせ受く　啓子
蕗味噌と地酒を抱へ留守居夫　和子

若鮎句会（浦和）

餡麺麭を子規と分けあふ春の夢　山菜
真つ白な答案用紙春の夢　稀香
沈黙のゴジラの背鰭春の夢　ひとみ
まだ早き桜の黙や春の夢　拓真
無事消光桃の節句はジルコン婚　真
春の夢無常に響く妻の声　貴
逢うたとてどうとはならぬ春の夢　芳春
笑ふ目の皺の深さや山笑ふ　秀子
人恋ふる鎮守の杜や山笑ふ　香音子
慈雨なれば寝起きのよい子山笑ふ　月を
天皇（すめらぎ）もおなごのときを山笑ふ　喜夫

山茶花（浦和）

春めいて木々の色づき一段と　美江子
昨夜（きぞ）の雨上り春めく池の色　マスミ

めだか句会（浦和）

寒明けや水の囁きそこここに　章
友と来て梅が香たどる静寂かな　嘉
凛として姿香りも夜の梅　尚己
梅香る日の暮れかかる野道かな　妙子
あらたなるいのちの知らせ梅の花　荘志
旅立つ子見守るのみや春告草　六弦
車椅子押す吾に笑むや朝の梅　美津子
梅が香に人事異動の予感かな　道代
花の兄や松と竹とを随へて　楽
重たげに鉢植ゑの梅白満開　月を
寒明けや太極拳の裾揺れて　はるみ
　　知子

水明鬼石句会（鬼石）

豆撒きやはりきる亡夫の声偲ぶ　聰子
請求書春の切手の貼られ来る　和子
水仙のほのかに香る仏間かな　ナヲ子

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

天心の日輪を呑む野火の煙　延昭
ナースよりバレンタインの日の注射　倶子
下駄箱にバレンタインのチョコそつと　由美子
半生語る女将の涙凝鮒　健司
バレンタインデー軒に列なす雀どち　美枝子
寒稽古弟子がうつちやる土俵際　洋子
煮凝や昨夜のいさかひ収め時　早都子
野を焼きて大利根毫もたぢろがず　昇

柿の木塾（浦和）

螢烏賊の沖漬に酌む越の酒　昇
水温む錠剤三粒飲み忘る　恵子
ほたるいか朝日の浜に身を残し　章嘉
酢味噌の酢少し甘めに螢烏賊　和葉
いそいそと俄巡礼水温む　節代
螢烏賊暗くて荒し富山湾　かつ子
螢烏賊食し猫背の父想ふ　和子

珊瑚の会（浦和）

春しぐれ片袖濡るる傘の内　喜恵
春時雨老幹ゆるぶ一の宮　マスミ
仲見世の人波崩す春時雨　昇
俳人はいつか樹となり春時雨　恵子
田楽に脇差し二本城下町　光子

小浜三丁町寄り添ひ歩く春時雨　史代
身の丈に生きて田楽味噌作る　広子
春時雨なほも寄り添ふ道祖神　和子
春時雨しるべ宮まで十八丁　和葉
鉄橋を渡る列車や春しぐれ　かつ子
田楽や屋台に今日も馴染客　節代

水明澪つくし句会（大阪）

水仙花毒忍ばせるかほりかな　智恵子
麦チョコのぱふんと割れて春めけり　人美
ちやんちやんこ一人碁盤に向ひけり　ノルン
玄関の隅に居坐る余寒かな　洋子

☆　☆

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。　主宰　山本鬼之介

[指導者]　網野月を
[作　品]　5句　[受講料] 1,000円
[方　法]　①用紙自由　②住所・氏名・電話番号を明記　③110円切手を同封　④返信用封筒は不要　⑤締切なしで随時受付
[送付先]　網野月を　電話 080－7580－0208
〒338-0012　さいたま市中央区大戸 1-31-2

水明創刊 95 周年
記念祝賀会・全国大会のお知らせ

■記念全国大会

日　　時　令和７年９月 28 日（日曜日）
会　　場　ロイヤルパインズホテル浦和
　　〒 330-0062　さいたま市浦和区仲町２－５－１
行　　事　・水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞、鼓笛賞、山紫賞の表彰
　　・季音昇欄同人、新季音同人、新同人への委嘱状授与
　　・大会記念作品の表彰（俳句、評論、エッセイ）
　　・大会兼題句の入選発表、表彰、講評

■記念祝賀会

日　　時　令和７年９月 28 日（日曜日）
会　　場　ロイヤルパインズホテル浦和
　　〒 330-0062　さいたま市浦和区仲町２－５－１
行　　事　・来賓挨拶（高野ムツオ現代俳句協会会長）他
　　・アトラクション他

※大会・懇親会の時間および参加費等の詳細については改めてご案内致します。

最近の名句集を探る　座談会
蒲原ひろし『愚戦の傷痕』
鈴木しげを『普段』
広渡敬雄『風紋』
司会＝筑紫磐井　大西朋　藤本美和子　渡部有紀子

第25回「俳句四季」全国俳句大会
予選通過作品発表

巻頭三句
星野高士／森清　堯
髙橋千草／柴田多鶴子
鴻野眞知子／降旗牛朗

今月の華
董振華／野崎海芋

俳句と短歌の10作競詠
渡邊新月＋藤井万里

LEGEND～私の源流
鍵和田秞子
……磁石・篠崎央子

人と作品
『澤田和弥句文集』
岸本尚毅／庄田ひろふみ
高井楚良／日下野由季

好評連載
成瀬政博　とりあえずの日々
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西朋　俳句へのまなざし
井上泰至　俳句の詩語イメージ辞典
神作研一　てのひらの江戸―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
堀田季何　諸家書架
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2025年5月号
4月19日発売
定価1100円（税込）
https://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

水明創刊 95 周年

記念特別企画

水明創刊 95 周年を記念して、記念特別作品を以下の要領で企画しました。全ての誌友・同人・季音同人の投句をお願いします。９月・10 月合併号に掲載する予定です。

投 句 要 領

【兼 題】　「水」　「明」

※詠み込み・通季（春・夏・秋・冬・新年いずれも可）で一句ずつ

【締 切】　7月 25 日

※投句用紙は６月号に添付します。

水明創刊 95 周年記念事業　実行委員会

俳句

5月号予告

4月25日発売

予価 1,300円（本体1,182円）⑩

巻頭作品50句　宮坂静生

作品21句　坪内稔典・津川絵理子

特集　わび・さびに学ぶこと

特別企画　没後20年記念鼎談　藤田湘子のメソッド　四ッ谷龍×小川軽舟×成田一子

追悼　高橋悦男

季寄せを兼ねた俳句手帖 夏

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

風　声

○**俳句界**一月号――「全国の秀句コレクション」欄

仏頭の割れ目に生ゆる夏の草　池田珪子

○**現代俳句**二月号――第一回現代俳句「風を詠む」欄

蜩や君のアドレスだけがない　池田珪子

足長の白さが美味深谷葱　井上燈女

障子に鬼と狐鳩来て影遊び　小林京子

カウベルをつけてもみたき熊の首　原田秀子

寒禽の鋭声疎林をほしいまま　丸山マスミ

寒鴉啼きて始動のロータリー　本橋稀香

水仙や介護審査の母凜と　葛城千世子

○**現代俳句**二月号――「「風を詠む」秀句を探る」欄

阿部満子氏の感銘八句抄に

水仙や介護審査の母凜と　葛城千世子

○**くぢら**（中尾公彦主宰）二月号――「受贈俳誌美術館」欄

麗しき木の葉をひろふ隠れ道　**鬼之介**

○**こんちえると**（関根道豊版元）一月号――「受贈誌紙お礼」欄

「くまモン」の表敬受くる檻の熊　**鬼之介**

天高し「ノーモア広島」に平和賞　茂木和子

この瞬間も砲弾の飛ぶ夜寒かな　青木鶴城

長き夜頑ゆゑの悔ふたつ　清水桂子

都会にも灯の無き場所や虫の闇　吉川拓真

○**こんちえると**（関根道豊版元）二月号――「受贈誌紙お礼」欄

容よく箸を使うて雑煮餅　**鬼之介**

遊び毛を顎に光らせ日向ぼこ　境　延昭

減反の田んぼ一面花芒　保坂翔太

秋の朝望みつなぐる平和賞　清水桂子

冬晴や神野紗季氏の句会けふ　吉川拓真

○**饗焔**（米田規子主宰）二月号――「一誌一句」欄

金秋や慶事に叶ふ青畳　**鬼之介**

○**鷗座**（松田ひろむ主宰）二月号――「愛唱一句」欄

野佛を蹴倒すほどに黍嵐　**鬼之介**

○**谺**（山本一歩主宰）二月号――「受贈誌の一句」欄

寝付かれぬ夜は語らむちちろ虫　菅原真理

（日高道を抄出）

後記

三寒四温の季語通り、今年は春の足音がなかなか聞こえませんでしたが、やっと桜吹雪に包まれました。それにしても日本人は桜が好きですね。

テレビでは連日、桜の開花のニュースをあと何日と流し、開花をしたら桜前線はいま何処ですと報じます。春は桜いいですね。

水明では、授賞委員会が白熱しています。「水明五月号」に各賞受賞の方々が全て発表されると思います。

二十二名の方々が挑戦されている新珠賞の選考会がこれからあります。届けられた応募作品全てのコピーを選考委員は選んでいる最中です。応募の方々が力作揃いで懸命さが伝わり、心して読ませて頂いています。

九月に行なわれる水明九十五周年全国大会には、受賞なさる皆様は、ご出席の事と思いますが、同じ句会の方、お知り合いの方も、こぞって全国大会にお出かけになって下さい。

新聞に終末時計二〇二五年版の時刻が「残り八九秒」とありました。終末時計とは米シカゴ大学の研究者らにより一九四五年に創刊され終末を示す午前〇時までの残りの時間だそうです。最初は「残り七分」だったのが、原水爆やら気候変動等で八九秒まで減ってしまったといいます。

その上、インフルエンザ、コロナ、はしか、風疹等のウイルスは常に人類を、動物を狙っています。ウイルスの魔の手から逃れるのは大変です。どうぞお気をつけて。（節代）

今月のはてな？

徜徉（しょうよう） 6
加太淡島（かだあわしま） 12
唳（な）けり 14
蹇（あしなえ） 28
海鹿島（あしかじま） 40
背守（せまも）り 49
加勢鳥（かせどり） 49
雛妓（すうぎ） 60
伐折羅大将（ばさらだいしょう） 63
小食蟻獣（こありくい） 66
餡麺麭（あんぱん） 69

頁

水明発行所受付時間

（048−822−4741）

曜日：（月・火・水・木・金）

時間：12時半〜午後4時半

（土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和七年四月号
通巻一一三五号
令和七年四月一日発行

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四−一〇−二二
電話 048−822−四七四一
ホームページ 「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇−〇−一九二三九三
発行人 山本鬼之介
印刷所 中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

季音 雪・月・花

六月号　四月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

題

氏名（俳号）

き り と り せ ん

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　　歳

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

水明集

七月号　四月二十五日締切

きりとりせん

都・市・町名	氏　名（俳　号）
都市町	

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　　歳

きりとりせん

山紫集

七月号　四月二十五日締切

七月の兼題

「春帽子」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　歳

季音抄

山本鬼之介

さよならが両手に残る余寒の日　鈴木康世
雛流し待つ雛たちよ眼を逸らす　十倉和子
蜆汁雨美しき水月湖　鳥羽和風
北窓開く父の医学書黒光り　永野史代
眼裏に大輪咲かせ牡丹の芽　星野和葉
口笛の寂しき音色猫柳　町野広子
淡月を浚はむばかり春疾風　松井由紀子
紐を組む春待つ色を重ねつつ　大場順子
母子像春まだ浅き影を曳き　梅澤佐江
風向きを変へ矍鑠と山笑ふ　池田雅夫
白梅や年縞眠る湖の色　松宮保人
口遊むゴンドラの唄紅椿　原田秀子
樽酒に木槌の一打初明り　保坂翔太
早春や勝利の騎手の鞭高し　笹本啓子
北窓開く母愛用の桐箪笥　石田慶子
料峭の先づ蟀谷（こめかみ）をおそひくる　石川理恵
組紐の色艶やかに春隣　河野はるみ
寒晴の鉄橋わたる「金太郎」　曲淵徹雄

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

蔵の隅絹糸古りたる手毬かな　小林京子

オリオンを通り抜けたる最終便　播磨進

百万石の加賀の雪吊り地球吊る　飯田忠男

枯木星話し相手のいらぬ夜　寺町知子

絨緞に乗りて浄土の見学に　清水桂子

もさりもさりもさり雪降る山の里　皆川更穂

セーターの淡きふくらみ手につつむ　元田亮一

無彩色の夕べに溶くる寒鴉　菅原真理

枯葉散る若き兵士の命散る　反町修

冬晴や丸き地球の見ゆる丘　岡田宣子

丑三つや聞こえてきたる雪の声　丸屋詠子

石段の三百余歩に今朝の春　阿部幸代

能舞台シテの一声淑気満つ　霜多光代

沖鳴りの島に孤峰や初弁天　菅原卓郎

電線のうなり聞く夜ののつぺ汁　池田珪子

寒椿ぽとんと落ちて恋終はる　新暦文

海鼠腸を食ふや元旦神々と　加藤でん治

初雪や手袋帽子飛び出せり　篠崎紀子

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 小林京子
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町修
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈜	大橋廸代	森本早苗

水明　令和七年四月一日発行　毎月一日発行

（第九十八巻　第四号）　定価　一〇〇〇円